# 月刊FALCOM MAGAZINE Vol.20



背中で語る男の美学！
英雄伝説　空の軌跡
リベール王国スナップショット

ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの舞台裏

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

ランディが“ 彼女 ”に渡したプレゼントとは!?
英雄伝説　零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

《結社》に誘拐されたエステルは……!?
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

ザナドゥで学べ、帝王学！
みんな集まれ ファルコム学園！

巻頭特集
小説『英雄伝説 零の軌跡 金の太陽、銀の月』
作家・市川丈夫インタビュー



# FALCOM MAGAZINE

## CONTENTS

# ファルコムロングインタビュー

## 小説『英雄伝説 零の軌跡 ～金の太陽、銀の月～』

# 市川丈夫インタビュー

**2010年に発売され、今年の10月にはPS VITAで『Evolution』としても発売される人気RPG『英雄伝説 零の軌跡』。その『零』が８月からノベライズされリリースが開始されている。今回はその著者、市川丈夫先生に直撃インタビュー！**




**——本書を執筆されることになった経緯を教えてください。**

**市川丈夫（以降、市川。敬称略）：**はじめにお話をいただいたのは今年の3月ですね。『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』が10月18日に発売することもあり、富士見書房さんの方で、『零』がらみの企画を動かされていたそうで、実際に企画が固まり始めた頃にお声がけをしていただいたという形です。

私自身、ノベライズの経験もありましたし、ゲームが好きということを富士見さんもご存じだったので、その辺りもお声がけいただいた理由のひとつかもしれませんね。

**——『英雄伝説 零の軌跡』（軌跡シリーズ）をプレイされた（シナリオを読んだ）感想はいかがでしたか？**

**市川：**このお仕事を請けた時点では『零』はまだ未プレイでしたので、さっそく担当編集の方にソフトを用意していただきました。その際に、一周どれぐらいの時間でクリアできるのかを聞いたところ、早くて50時間と聞いてびっくりした記憶があります（笑）。がんばって一週間でクリアしました。その後攻略本を読んだところ、一周だけではいけないということに気づき、急いで周回プレイもこなしましたね。

実際にプレイをした感想としては、すごくオーソドックスで王道だなというのが第一印象ですね。私たちがライトノベルのネタっぽさに毒されているのかもしれませんが、「まだこんなにも王道な物語でいいんだ」というような。子どもが遊んでも楽しめますし、大人でも楽しめる。プレイしていて安心できるしっかりとした作りだなと思いました。それと同時に、王道でおもしろいこの作品を、小説化するのは難しいぞ、となりましたね（笑）。オーソドックスなんですが、キャラクターたちの相関関係がきちんと考えられていますしね。特務支援課のメンバーで言えば、ロイドは感情的な一面も持っているのですが、理性的なエリィがいて、さらに理性的な方向にいるティオ、そして一番地に足がついていてバランスのいいランディ。物語の中でキャラクター同士がうまく補完しあってますよね。悪役の方を見てみても、すべての人物に生きる目的がきちんと描かれていますし。実際の執筆段階に入り、原稿作業をしていても、あまり違和感や疑問点がないんですよ。そして、「この設定は凝りすぎ、いらないんじゃない？」というところもないんですよね。このバランス感覚はすごいと思います。

**——日本ファルコムとの出会い、そしてイメージについてお聞かせください。**

**市川：**やっぱりファルコムさんと言えば、パソコン時代の『イース』とかのイメージでしたね。さすがに当時パソコンを買って、プレイをしたわけではないのですが、友だちの家に行って、触らせてもらった記憶があります。作家仲間に『零』のノベライズをやることを話した時にも、「あ、ファンタジーじゃないの？」とびっくりされましたし、私自身もファンタジックな『イース』のイメージを持っていましたので、『零』の世界観は新鮮でしたね。でも、今のプレイヤーさんにはファンタジックな世界よりも、『零』のような近代的な雰囲気を持った作品の方がいいんですかね？ かといって行き過ぎたスチームパンクではないですし、この絶妙な距離感がヒットした理由なのかな、と思いました。

**——『零の軌跡』はかなりテキスト量の多いRPGだったかと思いますが、どのように小説として構成しなおそうと思われましたか？ また、その際にファルコムとどのようなお話をされましたか？**

**市川：**まず序章に関しては他で小説化されていたので、ここは省きました。それを加味しても、終盤のグノーシスに関連したエピソードを中心に描いていくと、全3巻構成としてはあっという間に埋まってしまうボリュームですからね。ファルコムさんと直接やり取りをしたのはもちろん私ではなく、担当編集さんなのですが、この物語を描いていく中で、『空の軌跡』に登場したキャラクターの描写は抑えて描こうという提案をさせていただきまして、結果的にレンは登場するのですが、エステルとヨシュアの登場は控えて、より特務支援課の方へ話を集約していく構成となりました。この小説はあくまで『零』なので、『空』のキャラクターがたくさん出てきてしまうと、限られたボリュームの中で、彼ら、彼女らの背景を描いていかないといけなくなり、その分、支援課メンバーの活躍が減ってしまいますからね。すでに



プレイ済みの方にも読んでいただきたいのはもちろんなのですが、この小説で初めて『零』を知った、という方にも読んでいただきたいという気持ちもありますので。ファルコムさんの方にも、「最後は特務支援課で」という構成案を作り、許可をいただいて書かせていただいてます。まだすべて書き終えたわけではないのですが、エステルとヨシュアを最終決戦でロイドたちに同行させない理由を考えるのに苦労しましたね。「強いんだから一緒に行けばいいじゃん」となってしまうので。ゲームの方でもアリオスは同行しませんでしたが、そこは、「キーアを守ることが一番大切だ」という理由がきちんと存在しており、説得力があるなぁと感心しました。

**——第1巻が発売されて約一ヶ月が経ちましたが、執筆されてみていかがでしたか？　そして、第2巻以降について、お話できる範囲で教えていただけますか。**

**市川：**1巻はタイトル通り、第二章の「金の太陽、銀の月」までを描いたわけですが、1巻目ということもあり、世界観や各登場キャラクターの説明もあわせてしないといけなかったため、ボリュームとしては本筋を追うだけでいっぱいいっぱいでしたね。2巻以降はもうちょっと膨らませられたらいいな、と考えています。

**——『零の軌跡』で印象に残ったキャラクターやシーンを教えてください。**

**市川：**やっぱり一番印象に残ったキャラクターはティオですね。多分、この子が一番『零』の物語に関与しているんですよ、長い時間。でも、この子がど真ん中の主人公じゃないんですよね。その外し方がおもしろいなと感じました。ティオが主人公として、傷を克服するというテーマでも大きな物語になりうるんですけれども、それをあえて脇に置くというのが心憎いですよね。あと、1巻のあとがきにも書いたんですが、セルゲイ課長がやっぱりいいですよね（笑）。悪役でいうと、ヨアヒムはいい悪役でした。『零』は先ほども言った通り、子どもでも楽しめる作品だと思っているのですが、そうなると、悪役をどこまで悪くするかというところが悩みどころだと思うんです。あまり悪くない形で描くと、「無理に倒さなくていいんじゃないか」ってなりますが、彼はきっちりと倒されるべき悪役として描かれていましたし。直接の描写としてはそこまでひどい描写はないものの、プレイヤーにはそのひどさがきっちり伝わってきましたからね。これは、ヨアヒムというより、被害者のティオをはじめとする被害者の痛みというところからその悪事を浮き彫りにするシナリオがうまく働いてるからだろうなと、ここでもうまいなと思いました。

あと、キャラクターやシーンとはまた違うのですが、ロイドたちが持つ武器やクラフトがどんどん変わっていくのはありがたいです。このあたりが変わっていかないと、戦闘シーンのバリエーションがどうしても増えていかないので（笑）。

**——今後の展望、そして『碧の軌跡』についてお聞かせください。**

**市川：**現在、第2巻を12月に出せるよう作業をしているところです。その後の『碧』に関しては、もちろん編集部の方の判断もあるかと思いますが、ぜひやることができればなと思っています。

**——最後に、ファンのみなさんにメッセージをお願いします。**

**市川：**ゲームからオミットされた部分もあるのですが、特務支援課によりフォーカスが当たった形になっていますので、これはこれでひとつのアナザーストーリーになっているのでは、と思いますので、そのあたりを楽しんでいただけると幸いです。よろしくお願いします。

## プロフィール

**市川丈夫**
（いちかわたけお）
第10回富士見ファンタジア長編小説大賞でデビュー。代表作『ダーク・フロンティア・ブルース』『刹那のイグザルト』（以上富士見ファンタジア文庫）など。



## 既刊 / 新刊情報

**『英雄伝説 零の軌跡 (1) 金の太陽、銀の月』**
著者：市川丈夫
原作：日本ファルコム株式会社
カバーイラスト：エナミカツミ
本文イラスト：かしわ
発売中
価格：672円（税込）
ISBN：9784829146873
発行元：富士見書房

**『英雄伝説 零の軌跡 (2)（仮）』**
著者：市川丈夫
原作：日本ファルコム株式会社
カバーイラスト：エナミカツミ
本文イラスト：かしわ
発売予定日：2012年12月20日

# 英雄伝説　零の軌跡
## ～午後の紅茶にお砂糖を～

### 第7話　『ランディのプレゼント』

ゼムリア大陸西部にある自治州クロスベル。

エレボニア帝国とカルバード共和国という二大勢力に挟まれた都は、経済の発展とともに、犯罪組織の台頭や諜報謀略の温床といった闇の面も色濃くなり、さまざまな事件が起きていた。

クロスベル警察に新設された特務支援課に所属する面々は、微力ながらも人々の要請に応え、日々、信念を旨として街の平和のために職務に励むのだった。

しかし、人はパンのみにて生きるにあらず。紅茶にお砂糖も必要なのだ。

「え～っと……あと買ってないのは……」

ブラウンの髪の青年がメモを見ながらカゴに商品を入れていく。

捜査官ロイド・バニングスは、つかの間の昼休みに、仲間たちと百貨店《タイムズ》まで買い出しに来ていた。

昼時だけに、一階の食料品売り場は、とくに賑わっている。

「ロイド、ちょっといい？」

「ん？　なんだい？」

話しかけてきたのは、エリィ・マクダエル。パールグレイの髪を腰まで伸ばした美しい少女である。

前市長の孫娘で、射撃の名手。政界入りを嘱望された才媛だが、故あって警察官になっている。

「厚切りベーコンが特売らしいの。夕飯は炒め物なんてどうかしら？」

「ああ、いいね」



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



「じゃあ、買っておくわね」

やわらかい笑みを残してエリィは店の奥に向かった。

メモに書かれている物を探して、ロイドは別の方向へ。

ふと、ぬいぐるみやグッズのコーナーに目を向けると子どもたちに混じって、仲間の姿があった。

猫耳のような形の髪飾り（センサー）を頭に乗せた、ライトブルーの髪の少女が、真剣な表情をして商品棚を見つめている。

「こ、これは……限定色のみっしぃキーホルダー!?　しかし、同じ物の通常版は持っているわけですし、限られた予算を有効に活用するために、ここは自重すべきかと。で、でも、今、これを逃せば永遠に入手は不可能です……」

少女は名をティオ・プラトーといい、エプスタイン財団から支援課に出向している。

導力技術に精通し、超常の知覚力を持ち、十四歳とは思えないクールな言動をするのだが、みっしぃというマスコットキャラクターが大好きという子どもらしい面もあった。語り出すと止まらないほどだ。

う～ん、と悩んでいるティオに声をかける。

「どうしたんだ？」

「ハッ!?　ロイドさん……すみません、お買い物を任せてしまって」

「気にしなくていいよ。俺は見たいものがあるわけじゃないし。ティオ、なにか困ってるみたいじゃなかったか？」

少女が頬を赤らめる。

「……お恥ずかしいところを見られてしまいました」

「いや、そんなことないけど」

いつものクールな表情でティオが話す。

「色が違えば受ける印象は異なるわけですから、いわば別物。同じ形の通常版を持っていることは関係なく、これは限定グッズと考えられます。すなわち、購入するのになんら迷う余地などありませんでした。躊躇するとは、お恥ずかしいかぎりです」

「あ、ああ……そういう意味だったのか」

ロイドは苦笑する。

ティオが丁寧にみっしぃキーホルダーを手にして、会計へと向かった。

その後、必要なものをカゴに入れたロイドも、支払いのためにレジの列に並ぶ。

小さな女の子が走ってきた。

カゴが当たらないように持ち上げる。

ロイドの腹に、ライムグリーンの髪の幼い女の子が、体当たりしてきた。

どしんっ、と受け止める。

「おっと……いいタックルだな、キーア。でも、店内で走っ

たら危ないぞ」
「わかった。ロイド！　これ、買って！」
　特務支援課で保護している女の子、キーアだった。
　過去にいろいろあって、今はロイドたちが親代わりをしている。
　しゃがんで目の高さを合わせた。
「どれどれ？」
「これ」
　キーアが持ってきたのは、犬の首輪だった。
「ツァイト用か？」
「うん！」
　支援課には、この地方の伝説にある白狼がいる。ツァイトといって、ロイドたちメンバーを助けてくれている仲間だ。
　対外的には警察犬だと言い張っているが。
「なるほど、いいかもしれないな」
　誰に需要があるのか謎だが、プレートに《POLICE DOG》と書かれていた。
「えへへっ」
「せっかくだし、プレゼント包装ができるか訊いてみるよ」
「やった！　ロイド、ありがとー！」
「いいさ。キーアもツァイトも俺たちの大切な仲間だからな」
　頭をなでてやると、キーアがくすぐったそうに目を細めた。

　会計を済ませる。
　ロイドは他のメンバーたちを探した。
　エリィとティオは百貨店の入り口のあたりでおしゃべりして待っている。
　キーアを預け、もうひとりを探しに歩いた。
　もしかしたら二階だろうか？　と階段のほうへ向かったところ、赤毛で長身の青年を見つけた。
　ランディ・オルランド。
　元々は警備隊に所属していたが、素行不良でクビになりかけたところを特務支援課に引き取られた……と聞いているけれども、いろいろと事情がありそうだ。
「おーい、ラ……」
　名前を呼びかけたロイドだったが、口を閉じた。
　商品棚もない隅のほうで、何をしているのかと思えば、ちょうど通信を受けたところだったらしい。
　手にしたエニグマ――多様な機能を持った第5世代戦術オーブメント。通信機能も備えている――を耳へと当てている。
「おう、俺だ……ひさしぶりだな、元気か？　……ああ、したぞ、昨日の夜……」
　通信中らしい。
　そう長くもならないだろうから、ロイドは待つことにした。



　ほんの少し前――



　クロスベル自治州の西端に位置するベルガード門。
　その一角、導力通信機の置かれた部屋だった。私用の通信は、ここを使う規則となっている。
　現在の利用者はひとり。
　ミレイユ三尉は何度目かの深呼吸をした。
　ウェーブのかかった金色の髪をかきあげて、見られるわけでもないのに服装を整える。
　なんてことないはずなのに、無駄に緊張してしまっていた。
　わずかに震える手で、壁掛けの通信機の受話器を取る。
　暗記している番号を入力した。
　数回のコールで、通信がつながる。耳に当てた受話器から、青年の声が流れてきた。
『おう、俺だ』
「ッ!!　ランディ……あたしよ、ミレイユ」
『ひさしぶりだな、元気か？』
「まあまあね。あなた、昨日、連絡してきたでしょ？」
『ああ、したぞ、昨日の夜』
「タイミングが悪いわね。ちょうど偵察任務中だったから門を出ていたの」
『そうらしいな。まぁ、急ぐ用事じゃないからいいんだけどさ』
「ふーん、言ってみたら？　その急がない用事っての」
　とても気になりつつも、照れくさくて気のない訊き方をしてしまう。
　ランディが苦笑したのが聞こえてくる。見透かされているようで頬が熱くなった。
『ちょっと前に支援課でミシュラムに行ったんだ』
「ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）？」
『ああ、新しくオープンするビーチのほうも見せてもらったが、なかなか悪くなかったぞ』
「みんなで、行ったんだ？」
『ロイドたちとな』
「いいなぁ……あ……いえ、休暇がうらやましいって意味だからね!?」
『はいはい』
　ミレイユはＭＷＬに行ったことがなかった。べつに休暇がまったくないわけではないが、一緒に行くような親しい友人がいないし、ひとりで行くのは恥ずかしい気がする。
「それがどうかしたの？」
『みやげ話だけじゃなんだから、ちょっと渡そうと思ってる物があってよ。近いうちにメシでも食べないか？』

「え……メシって……物って……？」

『ああ、いや、そんな大層な物じゃないぞ。昇進祝いってやつだ』

すこし前に、ミレイユは准尉から三尉になっている。

とある事件により、警備隊の人手が足りなくなったせいだと思うが。

「……………今日？」

『え？　いや、今日でもいいけど。急だな』

「そ、そうかしら？　でも、ちょうど任務あけで、明日の朝までオフで、次はいつ休めるかわからないし、べつにどうしてもってわけじゃないけど」

『俺のほうは非番じゃないんだよな。今は昼休みだが……』

そういえば、通信機の向こうから人の声が聞こえている。外にいるのかもしれない。

『……まぁいいか。夕方にはあがれるだろうし、市内（クロスベル）でディナーでもどうだ？』

「ッ!?　ディナー!?　う、う、うん、かまわないわよ。どこに行くのか知らないけど」

『屋台で天上麺なんていいんじゃないか？　俺のイチオシ』

「……え……？」

べつに屋台がキライなわけではないが、ディナーという言葉の響きからは遠いような気がした。

でも、本気でオススメしているなら、断るのは申し訳ない。

どうしよう？

ミレイユが悩んでいると、ランディが笑いだした。

『はは……冗談だ。まだ夜までに時間あるし、ちゃんとした店を押さえておくって。楽しみにしとけ』

「ば、ばか。変なトコだったら承知しないんだからね!?」

またからわかれた。こういうところがランディは他の人たちと違うと思う。

ミレイユは若くして三尉という地位にある。警備隊の面々は敬意を払ってくれるが、そのぶん気安く接してくる者はいなかった。

女性として扱われることに慣れていないから、どうしたらいいかわからなくて、つい強く返してしまう。

素直な子のほうがかわいいんだろうなぁ……とは思いつつも。

『まぁ、店は任せてくれ。待ち合わせは、今夜の七時にアルカンシェルの前でどうだ？』

「うん……了解。本日十九時（ヒトキュウマルマル）に繁華街エリアのアルカンシェル劇場前で」

『お、おう。武装はしてくるなよ？　レストランに入れなくなるぞ』

「うっ……し、失礼ね。いつもどおりで行くわよ」



『オーケー。オシャレしてこい。じゃあ、そろそろ昼休みが終わっちまうからよ』

「うん」

音が消える。通信が終了した。

ミレイユは受話器を戻しながら、機械にしがみつく。膝から力が抜けそう。

「約束……しちゃった……」

ディナーの。

ランディと食事をするのが初めてというわけではない。彼が警備隊にいた頃は、訓練のあと、よく一緒に食堂へ行ったものだし。野戦食だって一緒に取ったし。

でも、今回のは、そういうのとは違うと思う。空腹を満たして体力を回復させるための食事ではない。

繁華街である。予約して。レストランだなんて。

しかも、オシャレを。

これは世に言う《デート》というミッションではないだろうか!?　たぶん、きっと。

ふ、ふふ、ふふふ……と口元が緩んでしまう。

ハッ!?　とミレイユは我に返った。

「ちょっと!?　どうして、私が喜んじゃってるわけ？　ランディのことだから大した意味なんかないわよ。あいつは毎日のように他の子ともデートしてるんでしょうし！　わ、渡したい物があるって言うから受け取りに行くだけのことよ！」

「あ～、ミレイユ三尉……？」

「ひゃっ!?」

いつの間にか後ろで待っていた壮年の隊員に声をかけられ、飛び上がった。

「……そろそろ通信機を使わせてもらえませんかな？」

「し、失礼しました！」

あわてて部屋を出るのだった。



ふたたび、百貨店――

ロイドは通信を終えたランディに声をかける。

「やあ、そろそろ行こうか？」

「おっと。なんだよ、聞いてたのか？」

「それほど聞こえてはいなかったけど……ミレイユ三尉だろう？」

「ああ、元気にやってるみたいだ」

「そうか」

入り口のほうへ向かおうとすると、ちょうど緑色の髪をした細身の青年が歩いてきた。

ワジ・ヘミスフィアだ。

　テスタメンツという不良グループのリーダーだが、先日、なにを思ったか支援課に志願してきた。今は臨時の準メンバーとなっている。
「ちょっといいかい？　ロイド、ランディ」
「結局、ワジも来たのか」
　支援課ビルでくつろいでいるはずだったのに、とロイドが言うと。
「急な支援要請があったからね。ノエルも外で待ってるよ」
「なんだって⁉」
　ロイドは緊張を高めた。
　ランディの表情も、いつものにやけ顔から、ひきしまったものに変わる。
「わざわざ呼びに来るなんざ、よっぽどの急ぎか？」
「全員が揃ったら現地に向かいながら話すよ」
　ワジが入り口のほうへと向かう。
　ロイドはランディと共にならんで追いかけた。

　百貨店の外に出る。
　店の前に、支援課の導力車が待っていた。
　エリィたちは、もう乗りこんでいる。
　運転席側の窓からモスグリーンの帽子をかぶった少女が、手を振った。
「ロイドさん、こっちです！」
「ああ！」
　ノエル・シーカー曹長は警備隊に所属しているが、現在は、特務支援課に出向している。
　武器の扱いだけでなく、運転技術も優れているため、たいてい導力車のハンドルは彼女が握っていた。
　とある事件を解決したご褒美……というわけでもないだろうが、支援課にも導力車が支給されたのだ。それだけ期待されているということだろう。
　急いでいる状況では、とくに助かる。
　今のように。
　すでに状況を把握しているノエルがクルマを発進させる。
　支援課メンバー六名と、キーアが乗っているのを確認して、ロイドはうなずいた。
「ワジ、状況を説明してくれ」
「ja（ヤー）・先ほど、支援課ビルに直接、クロスベル国際銀行（IBC）から支援要請があった。連絡してきたのは、あのマリアベル嬢だよ」
「ベルが……」
　つぶやいたのは、エリィだった。
　マリアベル・クロイスはＩＢＣ総裁の娘で、父親が新市長になったため、ＩＢＣの事業運営を一手に引き受けている。



　エリィとは幼馴染みで親友の間柄だ。困っているなら手助けしたいと思うのは当然だろう。
　ワジが説明を続ける。
「ＩＢＣに来てくれという話でね。大事件というわけではないけど、急ぎの要件らしいよ」
「詳しくは現地で、というわけか」
「僕とノエルだけでもよさそうだったけど、ＩＢＣに行くなら、百貨店は途中だからね」
「合流できてよかったよ。なにかあっても導力車がないと、すぐには駆けつけられないしな」
　ロイドの言葉に、ワジが微笑んだ。
　運転席からノエルが声をかけてくる。
「はい！　到着しました」
　ＩＢＣ玄関前にクルマをつけて、ロイドたちは外へ出る。
「あたしはキーアちゃんと待ってますね」
「ありがとう、ノエル」

　大きな玄関扉をくぐって、ロビーに入る。
　あいかわらず広い。
　エレベータホールのソファ前にふたり。金髪をくるくる巻いた髪型のマリアベルと、壮年の男性がいた。
　ロイドたちは駆け寄って尋ねる。
「どうしましたか⁉」
　安堵したような笑みをマリアベルが浮かべた。
「お待ちしていましたわ」
「おお、あなた方が特務支援課ですか⁉」
「ええ」
　壮年の男性が、祈るように手を合わせる。
「私はクロスベルの郊外で工場を経営している者です。今日は工員たちのボーナスを引き落としに来たんですが……そのミラを入れたカバンを持って行かれてしまって……」
「なんですって⁉」
　ロイドだけでなく、他の支援課メンバーたちも驚いていた。
「それは、大変お困りでしょうね……」
　エリィが言えば、ティオがうなずいて。
「……事件です」
「置き引きってやつか？」
　とランディ。
　ワジが肩をすくめた。
「でも、ＩＢＣなら防犯カメラがあるんじゃない？」
「そのとおりです」
　マリアベルが銀色のアタッシュケースを出した。

「持って行ったのは、うちと何度も取引のある顧客で共和国の方ですの。身元の確かな紳士ですし、防犯カメラの映像によると、どうやら似たようなアタッシュケースだったので間違えてしまったようですわね」

事件といえば事件だが、手違いによるトラブルだったらしい。

「つまり、そのマリアベルさんの持っているのが、間違えて持って行ってしまった紳士の、本来の持ち物ということですか？」

ロイドが確認すると、彼女がアタッシュケースを渡してきた。

「そういうことです。ロイドさん、悪いですが、この荷物、届けてくださらないかしら？　この時間なら、まだタングラム門は出ていません。あちらは今日の夜までに、その書類を持って国に戻らなければいけないハズですの。そして、こちらの社長さんも……」

「お願いします！　今日の終業時間までにミラがないと、ボーナスが払えません！」

「わかりました。すぐにタングラム門に向かいます。全力を尽くすので待っていてください」

深々と頭をさげる社長に、ロイドは力強い言葉をかけ、仲間たちを外へとうながす。

状況が状況なのでマリアベルとエリィに個人的な会話はなかったが、互いに視線を交わしていた。

ＩＢＣを出ると、もう導力車が外へ向いて待っていた。

ロイドたちはクルマに乗りこむ。

「どこに行きますか？」

尋ねてきたノエルに答える。

「タングラム門へ！　急いでくれ！」

「おやすいご用です！」

言うなり、導力エンジンがうなりをあげた。

キュッと小さくタイヤを鳴らして、発進する。

「フフ……安全運転で頼むよ？」

ワジの言葉に「もちろん」とノエルは返したが、いつもよりはスピードが速い。

「キーア、しっかり掴まってください」

「うん！」

ひとつのシートをふたりで使うティオとキーアが、お互いに掴まり合う。シートベルトもあるし、大丈夫だとは思うが。

ロイドは預かり物のアタッシュケースを、しっかりと両腕で抱えるのだった。





タングラム門――

導力車が到着すると、今度はワジが残るという。

「ここはノエルのほうが詳しいだろ？　僕がキーアと待ってるよ」

「わかった」

ロイドはアタッシュケースを持ってクルマを降りる。

キーアが申し訳なさそうにして。

「ごめんね、ワジ」

「いいさ。こういう堅苦しい場所は苦手だしね。百貨店には、なにか面白いものが売ってたかい？」

「うん、ツァイトの首輪を買ってもらったの！」

「なるほど、それはきっと喜ぶだろうね。何色にしたんだい？」

導力車のなかでお話ししているワジとキーアを残し、ロイドたちはタングラム門へと向かった。

ゲートの左側にあるカウンターにいる隊員に話しかける。

ここは、ノエルに任せることにした。

「おつかれさまです、オリバー隊員」

「おや、ノエル曹長じゃありませんか。おつかれさまです。今日は支援課の任務ですか？」

「はい。通行者リストを調べて欲しいのですが……」

ノエルから、探している相手の名前を伝えてもらう。

オリバー隊員がなにか思い当たったらしい。

「あ、その人なら、別室にいますよ」

「え？　なにかあったんですか？」

「申請なしに大きな額のミラを持ち出そうとしたので、取り調べ中です」

「あっ、なるほど」

犯罪防止や関税のため、高額なミラや物品を持ち出すには申告と身分証明が必要となっている。

中身は書類だと思っていたアタッシュケースに、たくさんミラが入っていたら、取り調べとなるのも当然だろう。

ロイドたちが別室に行ってみると――

予想通り、困惑した様子の紳士が、冷や汗を流していた。

「本当に知らないんです。どうして私のカバンに、こんなにミラが……しかも大切な書類はなくなっているし……」

「うーん、そう言われても困ったであります」

弱り顔の警備隊員にノエルが声をかける。

「ちょっといいですか、ジャック隊員」

「ん？　あっ、ノエル曹長！　おひさしぶりであります！」

「おひさしぶりです。こちらの紳士の身分証明と、そのミラの入ったアタッシュケースの引き取りに来ました」

「えっ!?」

驚いた顔をするジャック隊員と紳士に、ロイドのほうから事の顛末を説明した。

「――というわけで、そのミラの入ったアタッシュケースが、とある工場の社長さんの物であることは間違いないと思います」

「そ、そうだったのか！　ああ、私は、なんという間違いをしてしまったのか……」

紳士が頭をかかえる。

ジャック隊員は胸をなでおろした。

「なんにしても、ミラの持ち主もわかったし、この人の身分もはっきりしたから、よかったであります」

「アタッシュケースが戻れば、とくに問題にはしないとのことですから」

落ち込んでいる紳士をエリィが元気づける。

ランディはミラの入ったアタッシュースを預かり、口笛を吹いた。

「たんなる書類が、こいつに化けたら、たしかに驚くだろうな」

「念のため、数えさせていただきます」

ティオの言葉に紳士がうなずいた。

ロイドは懐からエニグマを出し、状況をマリアベルに報告することにした。

IBCの受付を経て、彼女へと繋いでもらう。

『おつかれさま、ロイドさん。追いつくことはできたかしら？』

「はい。今、ミラを確認しているところです」

『さすがは支援課ですわね。いつもながら手際がよくて助かります』

問題なくすべてのミラがあることを確かめてから、ロイドは書類の入ったアタッシュースを紳士へ手渡した。

彼は深々と礼をする。

「その社長さんには、後日、改めて謝罪に伺わせていただきます」

「伝えておきます。道中、お気をつけて」

紳士はタングラム門のゲートをくぐり、共和国へと帰っていった。

今度はミラの入ったアタッシュースを抱えて、ロイドたちはIBCへと戻る。

何度もお礼を言う社長を見送り、マリアベルからも感謝され、ようやく、ひとつの支援要請を達成した。

IBCを出たところで、エニグマに通信が入る。

「はい、こちら、ロイド」



『あ、フランです』

「やあ、どうかしたのかい？」

フラン・シーカーは警察本部のオペレーターを勤める女性警察官だ。ノエルの妹でもある。

『鉱山町マインツから、緊急の支援要請が入りまして。行けそうですか？』

「マインツから？　もちろん、行かせてもらうよ」

『バス停の、すぐ近くに大型の魔獣が出たらしいです』

「わかった」

エニグマをしまい、みんなに話を伝える。

すぐに向かおう、ということになった。

「キーア、もうすこし出かけることになるけど……大丈夫か？」

「うん、へいき！」

「今度は私が一緒にいます」

ティオが請け負って、魔獣退治は他の五人でやることにした。

導力車で鉱山町マインツへと向かう。



クロスベルの街を西日が赤く染めている。

結局、ロイドたちが支援課ビルに戻ってこられた頃には、もう夕方になっていた。

「ふぅ……今日はいつにも増して忙しかったな……」

「本当ね」

ロイドの疲れた声にエリィが苦笑した。

ようやく、百貨店での買い物を開けられる。

一足先に自室へ戻っていったランディが、紙袋を持って降りてきた。

「ちょいと出かけてくるわ」

「あ、そういえば、約束があったんだったな。時間、大丈夫か？」

「先輩、送りましょうか!?」

ロイドとノエルに、ランディが手を横に振った。

「いや、そんなギリギリでもねえよ。ちょっと早いくらいだ」

「それならよかった」

「じゃあ、あたしは導力車を洗ってきますね。今日は、いろんなところを走ったから泥だらけになっちゃってるし」

「おう、そうしてやんな」

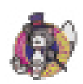
「フフ……余裕があるなら、シャワーくらい浴びて行ったらどうだい？　それとも、向こうで浴びるのかな？」

くすくすと笑うワジに、ランディが肩をすくめる。

「そんなんじゃねえよ。もちろん、シャワーくらい浴びてくっての」

　ランディは紙袋を応接スペースにあるソファのうえに置くと、風呂場へと向かった。
　キーアがやってくる。
「ツァイト、今日ね、百貨店で首輪を買ってもらったんだよ！」
　紙袋を見せた。
「ウォン！」
　ツァイトが鳴く。
「えへへっ、かわいいんだよ～」
「グルル……ウォン！」
　はたはたとツァイトが尻尾を振った。
　そのとき、エリィが台所から声をかけてくる。
「ロイド、夕飯の準備をするのだけれど、ちょっと手伝ってもらっていいかしら？」
「ああ、もちろん」
「あ！　キーアも手伝う！」
「ほんと？　ありがとうキーアちゃん」
「うん！　えっと、ツァイト、ちょっと待っててね！」
「ウォン」
　かまわないから行くといい――といった様子でツァイトは伸びをすると、ふたたび丸くなって目を閉じた。
　キーアは応接スペースの机のうえに紙袋を置いて、台所へ。
　ほほえましく思いながらロイドも手伝いをしに顔を出す。

　こうして、ロイドとエリィとキーアは料理。
　ノエルは洗車。
　ワジとティオは自室に戻り、応接スペースには丸くなっているツァイトだけになった。
　シャワーを浴びたランディがやってくる。
「やべえな……思ったより時間かけちまった。待たせると、うるさいからなぁ」
　応接スペースの机のうえにあった紙袋を手に取り、彼は繁華街へと足を向けるのだった。



　夕飯のあと――
　キーアは応接スペースに置いておいた紙袋を手にして。
「ツァイト、今、つけてあげるね！」
「ウォン！　グルル……」
「あれ？」
　使い終わった食器を台所に運んだロイドは、紙袋を手にして固まっているキーアを見かけた。
「どうしたんだい？」
「あ、ロイド……あのね、これなんだけど……」



「今日、買ってきた首輪だろう？　なにか問題があったのか？」
「ミシュラムって書いてあるみたいなんだけど……百貨店は違うよね？」
「とくに、ミシュラムには関係なかったと思うけど……」
　手に取ると、たしかに首輪というには軽すぎる気がする。
　そもそも、中に箱が入っている感じだ。
　プレゼント包装はしてもらったが、こんな立派な包装ではなかった覚えがある。
　ロイドは念のため紙袋をやぶかないようにして、開けてみることにした。
　キーアが不安そうに見つめている。
　中を確かめて、ロイドは息を呑んだ。
「これは……!?」
「な、なんだったの、ロイド!?」
「たぶん、ランディのだ！」
「あ……」
　ただならぬ様子に、食器を洗っていたエリィとノエルがやってきた。
　導力端末をいじっていたティオもだ。
　ロイドの周りに、エリィ、ティオ、ノエル、キーアが集まる。
　どうやら自分の役目はないと思ったのか、ツァイトは端のほうで寝そべった。
　もう一度確かめてから、ロイドは結論づける。
「この紙袋は、ミシュラムの宝石店で使われていたものだと思う」
　エリィが首をかしげる。
「ロイド、どうして、ミシュラムの宝石店の紙袋なんて知ってるのかしら？」
「えっ!?」
「……誰かに買ってあげたことがあるんでしょうか？」
　ティオがジト目になっていた。
　ノエルが首をかしげる。
「たしかに、不思議ですね？」
「……どうやら、ノエルさんではないようです」
「そうみたいね」
　階段を下りてくる足音がした。
「なんだか騒がしいじゃない、どうしたんだい？」
「ああ、ワジ」
「ん？　珍しいね、そんなふうに女の子に囲まれて……いや、君の場合、それほど珍しくもないのかな」
「べつに囲まれてるわけじゃ……」
　しどろもどろにロイドが言う。つつっと女性陣が赤面して距離を取った。

「そうよ、べつにロイドを囲んでたわけじゃないのよ」
「……事件です」
「あ、そうなの。ロイドさんがミシュラムの宝石店の紙袋を知っていたという……」
　ノエルの言葉をエリィが訂正する。
「そうじゃなくって。ランディが間違えてミシュラムで買ったプレゼントを置いて行っちゃったらしいのよ」
「首輪、持って行っちゃったの！」
　キーアがつけ足した。
　ため息まじりにロイドが頭をかく。
「途中で気づいてくれればよかったんだけど……もう一時間は経ってるからな」
「追いかけましょう！」
　ノエルの提案に反対する者はいないが、エリィは表情を曇らせる。
「ランディがどこにいるか、わからないと」
「導力通信は試してみたかい？」
「あっ、そうか！」
　ワジの問いに、ロイドはエニグマを取り出して、ランディに連絡してみる。
　しばらく待ったが。
「…………だめだ。もしかして、導力を切ってるのかもしれない」
　ワジが首をひねる。
「デートだと、そういうシチュエーションもありそうだけど、ちょっと時間が早いかな。導力通信の届かないレストランの可能性が高いね」
「そういう店もあるのか」
「多くはないけどね」
　待機中ならともかく、休暇のときであれば、通信が届くところにいなくても仕方がない。
　ロイドは思案する。
「多くないといっても、全部の店を回っていたら、ランディがプレゼントを渡すのに間に合わないよな」
「うん……クロスベルで気合いの入ったデートをするなら、繁華街のレストランだと思うけど？」
「そういえば〝店を押さえておく〟と言っていたのが聞こえたな」
　ティオが導力端末のところへ向かう。
「……つまり、ランディさんは繁華街の店を予約したということですね。高級レストランであれば、予約リストを導力端末で管理している可能性が高いです。ネットワーク側から調べてみましょう」
「そんなことができるのか!?」



「……緊急事態ですから」
　ティオは無表情なまま、ぽつりとつぶやいた。
　端末のキーボードをマシンガンのように細い指が叩く。
　画面を無数の情報が流れる。
　やがて、レストランの一覧が出てきた。
「……ワジさん、このなかで可能性の高い店は、わかりますか？」
「もちろん。僕はこの街（クロスベル）の高級店ならすべて把握してるからね」
「……確率の高い順に当たっていきましょう」
「ああ。ここと、ここと、ここと……」
「該当ナシ……該当ナシ……該当ナシ……」
　エリィが首をかしげる。
「うーん、本当にいいのかしら？」
　ノエルは戦闘時のような真剣な表情をしている。
「ランディ先輩の緊急事態ですからね。それにミレイユ三尉もです」
「たしかに、デートで犬の首輪を渡されたら、ビックリするでしょうね」
「ビックリで済めばいいですけど、ショックだと思います」
「そうね。緊急事態だわ」
　熱を帯びた支援課メンバーたちの様子を、応接スペースの隅で、キーアはツァイトの背をなでながら見守っていた。
「だいじょうぶかな？」
「グルル……」
「うん？　そうだね、すぐ首輪も戻ってくるね、ツァイト」
「ウォン！」
　ティオの指が、タァンとキーを叩いた。
「ビンゴです……該当者アリ、予約は二名。場所は――」

　クロスベル市繁華街、高級レストラン《プレミアム》三階。
　清潔感のある白を基調とした店の中央には、小さな噴水がある。
　優雅な音楽が奏でられ、精緻な意匠のテーブルには薔薇が飾られていた。
　ため息をついて、ミレイユは窓の外を見る。
　繁華街の煌めきのなかにアルカンシェル劇場が浮かんでいた。
「ふぅ……なんだか……物語の国に来たみたい」
「緊張しちまうか？」
「そうかも。いつもは、埃と硝煙にまみれてライフル抱えて走り回ってるもの」

「そーいうのも似合ってるが、今日の格好も悪くないぜ」

「ば、ばか。からかわないでよ」

文句を言いつつも、内心でヨシッと思ってしまうミレイユだった。

今日は、さんざん悩んだ結果――首もとの開いた水色のセーターワンピースを選んできた。

いつか使う日もあろう、と買っておいたものだが、いざ着てみると肩とか胸元が露出しすぎて抵抗があったので、青いスカーフを巻いている。

丈もちょっと短めだったので、グレーのタイツをはいていた。

そして、靴は無理してハイヒールにしてきたが。

歩きにくい。

山中行軍の訓練かと思う。

転んだら恥ずかしくて死んでしまいそう。

なんでもないタイル張りの道が、地雷原に変わる。

売り場の店員は、慣れれば大丈夫ですよ～と笑っていたが、装備に身体を合わせろ、ということか。警備隊では左利きでも右手で拳銃を扱うように矯正されるが、それと同じか。

「オシャレって訓練に似てるわよね」

「なに？」

「あ、いえ……それより、こんな高そうな店、大丈夫だったの？」

「心配すんなって、そこまで安月給じゃないからよ」

運ばれてきた料理は、どれも満足できる味つけだった。オードブルには魚の赤身と豆腐のお造り。

次は、ワイングラスに注がれた透明なスープ。

「繊細な味わいね」

「いいだろ？」

「野戦食とは大違いだわ」

「それと比べるのは、どうかと思うがな」

笹の葉でくるまれた鱈とホタテのバター蒸し。香ばしさに目眩がする。

「お、おいし～」

「はは……そうだろ？」

いつもは素直に言えないミレイユも、これには賛辞を惜しまなかった。

メインのパスタと肉料理も絶品だった。

食事がひとだんらくして、お互いの前にはデザートのプリンとグラスだけになる。

ランディが紙袋を差し出してきた。

「これ……話してた、ミシュラムの土産な」

「あ、うん」

「おや？」





差し出したランディが、怪訝な表情を浮かべた。

紙袋を見つめる。

「どうしたの？」

「あ……いや……なんかな……？」

「あの、あまり高い物だったら、私は……」

「いや！　そういうんじゃねえんだ。昇進祝いだと思って、受け取ってくれ」

「……うん。あ、あり、ありが……」

「蟻？」

「んんっ、そうじゃなくて！　その……ありがとう」

消えそうな声で言って、ミレイユは紙袋を受け取った。

開いてみる。

銀色に光っていた。

思ったよりも大きい。腕輪？　いや、もっと大きい。

もしかして、ベルトかも？　革でできているし。

でも、それにしては短い気がする。

いくらミレイユが引き締まっていても、これを腰に巻ける自信はない。

金属プレートに《POLICE DOG》と書かれていた。

「なっ!?」

ミレイユは目を見開く。

――これ、首輪だ!!

しかも大型犬用。

ランディが頬をぽりぽりとかく。

「まぁ、趣味じゃねえかもしれないが……」

「あ……うん……」

こういう趣味は持ち合わせていないし、そう誤解されるようなことをした記憶もない。

ランディの趣味……なのだろうか？　その線はありそう。

あるいは、皮肉だろうか？

首輪。

犬。

飼い犬。

そう言われても仕方がないような事件があった。警備隊の人手不足から昇進したものの、ミレイユの心に重くのしかかっている失態。

昇進は、より責任ある立場で汚名返上せよ、という意味だと捉えてがんばっているけれど……ランディは、どう感じているのだろうか？

訊いたことがなかった。

あまり階級とか気にしない人だと思ったし。

あの事件については――ミレイユは被害者だとか、立場的に仕方なかった、気にするな、失敗したと思うなら取り戻すつもりで努力しろ――そうランディから言われたから。



信じていた。

彼が不安そうな顔をする。

「なあ、ミレイユ、どうした？　気に入らなかったら、無理しなくてもいいぞ？」

「わ、私……わからないの……」

「なにが？」

「頭のなか……ごちゃごちゃだわ。ランディのこと、ぜんぜん、わからなくて……」

「そ、そんなに!?」

ランディが腰を浮かせた。

冗談を言っている様子はない。

なにか深い意味があるのだろうか？　ミレイユにはわからなかった。

「ほんとに……どういうことなのか……私……今日は、頭、冷やしたいから……」

席を立つ。

「おい、ミレイユ……どうして？」

「ごめんなさい。帰ってよく考えてみる」

「ちょっ……待てって！」

笑って「バカだな、冗談だっての！」なんて言ってくれれば、止まれたかもしれない。彼の真剣な表情に、逆に混乱は加速してしまった。

逃げるように店の外へと走る。

ハイヒールのせいで足元が不安定だったけれど、これ以上ランディの前にいると、言いたくないことまで言ってしまいそうだった。

エレベーターを待つのももどかしく、階段を使って駆けおりる。

ビルを飛び出し、繁華街を抜けて。

気がつけば、バス停も通り過ぎていた。

「……西の街道だ」

ミレイユはつぶやいた。街灯もない西クロスベル街道を歩いていく。

もう市外だから魔獣が徘徊しているはずだった。

装備はなにもない。

手にしているのは首輪の入った紙袋だけ。

それと、小さなハンドバッグ。中には最低限の化粧道具とハンカチくらい。

小型の導力銃すら入っていなかった。こんなふうに帰るなんて思ってもみなかったから。

結局、ランディは追いかけてこなかった。

からかわれたのだろうか？

ひどいなあ、と思う。

もしかしたら、ミレイユのほうがいつもみたいに怒って返したらよかったのだろうか？

あるいは、なにか前向きな意味があるのだろうか？　それくらいは訊いてみればよかったかも……

頭に血がのぼってしまって冷静な判断が下せなかった。

今からでも戻ったほうが？

真っ暗ななかで、がくん、と足元が滑った。

「あうっ!?」

そんなに足場が悪かったかしら、と視線を落とす。靴のヒールが妙な角度になっていた。

「これ……折れてる？」

舗装された道をしずしずと歩くためのオシャレな靴だ。警備隊員であるミレイユが全力で悪路を走ったら、壊れるのも無理はない。

「……買ったばっかりなのに……ほんとに、私って……女らしくないなぁ」

ずっと耐えてきたのに、とうとう目元が熱くなった。

ロイドたちは高級レストラン《プレミアム》を訪れた。

ここをランディが予約していたことは、ティオの調べで判っている。

繁華街の一角にある細長いビルだ。その玄関前に、ノエルは導力車を停めていた。

着いたとき、ちょうどミレイユが走り去っていくのが見えた。

それからしばらくして——

ランディが出てくる。焦った様子で周りを見渡した。

ロイドは駆け寄る。

名前を呼んだ。

「ん？　あれ、ロイドじゃねえか。どうしたんだ、こんなところで？」

「すまない、遅くなった！」

「なんの話だ？　悪いんだが、今、ちょっとばかり急いでてよ……」

「これだろ？」

ロイドは紙袋を出した。

ランディが目をしばたたく。

「あれ？　その紙袋は……どういうことだ？」

「実は、ランディが持っていったのは、俺が百貨店で買ったツァイトの首輪だったんだよ！」

「おいおい、マジかよ!?」

飛び上がる勢いだった。



無理もない。

「ソファのうえに置いただろ？　それなのに、机のうえにあった紙袋を持って行ったんだ」

「うげ!?　しまった……そういうことだったのかよ！」

「ミレイユ三尉、怒らせたのか？」

「怒らせたというか、泣かせたというか……まぁ、ようやく急に帰った意味がわかったぜ」

「たぶん、タングラム門に向かったんだと思う。ここに到着したとき見かけたから、ワジに追ってもらってるんだ」

ロイドはエニグマを取り出した。

「…………」

『やあ、そろそろ連絡が来る頃だと思ってたよ』

「ミレイユ三尉は？」

『西クロスベル街道だよ。そろそろ橋を渡るところさ。女性のひとり歩きには向かない場所だし、早く来たほうがいいんじゃない？』

ロイドはランディのほうを見る。

彼はうなずいた。

「ああ、聞こえたぜ。いろいろ、ありがとうよ！」

駆けだした彼のほうへ、ノエルが導力車から声をかける。

「ランディ先輩、送りますよ!?」

「サンキュ！　でもここまでしてもらって追いかけるのまで人任せじゃ情けねえ。これ以上、あいつに格好悪いとこ見せたくないんでな。気持ちだけもらっとく！」

「あ……了解です！」

ノエルは導力車のなかで警備隊式の敬礼をして、ランディも軽く右手をかざして返した。

左手には、今度こそプレゼントの紙袋を持っている。

走り去るランディを見て、ティオが目を丸くした。

「……ランディさん……速いです。もしかして、シルフィードの魔法（アーツ）？」

エリィが首を横に。

「いつも大きくて重たいスタンハルバードを持っているから遅く見えるだけじゃないかしら？　私も鍛えているつもりだけど、あれは持つだけでも、けっこう大変だと思うわ」

「なるほど……さすがは元警備隊です」

ティオが感心している間に、赤毛の青年の姿は繁華街から消えていた。

ロイドのエニグマから、ワジの声が聞こえてくる。

『やれやれ……もう、お役ご免かな？』

「そうみたいだな。あの調子なら、すぐ追いつくだろう」

『せっかく外に出てきたし、僕は夜遊びして帰るよ。ロイドも行くかい？』

「はは、やめておくよ」

『振られちゃったか。仕方ない、また今度だね。おやすみ、ロイド』

　そう言って、ワジからの通信は切れた。

　きっと朝方に帰ってきて、朝食のときには平然とした顔をしているだろう。

　ロイドはエリィとティオと、導力車へ乗りこむ。ノエルが導力エンジンのスイッチを入れた。

「もう出しちゃっていいんですか？　ワジ君は？」

「ワジは寄り道して帰るそうだ」

「まったく、仕方のない人ね」

「……戻りましょう、キーアが待っています」

「はい、そうしましょう！」



　ひたひた、と夜の橋のうえをミレイユは歩く。

　結局、片方だけハイヒールだと歩きにくいので、両方とも脱いでしまった。

　壊れた靴をぷらぷらさせて。

　この調子だとタングラム門につくのは朝方かもね、などと思いながら。

　ヴゥゥゥン……

「え？」

　夜闇のなか、ぞわりと背筋を冷たくする羽音がした。

　ぬめりとした体が空中で、月の光に反射する。

　赤い目玉が光った。

　蝿のような頭と蜂のような胴体。耳障りな羽音をまき散らして向かってくる。

　尾についた槍の穂先のような針が、ミレイユのほうを向いていた。

「くっ⁉　ブラックハンター⁉」

　普段の装備ならば、まったく問題にしない相手だが、今は武器がない。

　素手でも負けるとは思わないが、あの魔獣は毒を持っているのだ！

　今日は戦術オーブメントを持ってきていない。魔法による回復はできない。かすっただけでも、大変なことになる！

「攻撃を受けるわけにはいかない……‼」

　身構えたミレイユに、魔獣が襲いかかってきた。頭上から羽音が迫る。

　――躱して、反撃を叩きこむ‼

　身を低くして避けたところまではよかったが、左足に鋭い痛みが走った。

「痛ッ⁉」

　踏みこんだときに、尖った石かなにかを踏んだらしい。

　素足での戦いが、これほど難しいなんて。

　こんな有様では戦えない。

　羽音が再び頭上から迫ってくる。

「ううぅ……」

「――マグナブレイズ‼」

　暗闇のなかで声がした。直後、羽虫の形をした魔獣の周囲に赤々と輝く炎が集まって。

　爆発した。

　ズゥン！　と空気を震わせる衝撃。

　魔獣が消え去る。

　一瞬だけ照らされた橋の先に、赤毛の青年の姿があった。

　月明かりだけの夜闇に戻る。

　もう羽音はしなかった。

　こつ、こつ、と足音が近づいてくる。

「すまなかったな、待たせちまって。ケガはないか？」

「……ないわよ、あんなの相手に」

「左足を痛めなかったか？」

「見てたわけ⁉」

「エニグマの駆動中だったんでな。俺も武器を持ってきてなかったし、相手は飛んでたからな」

「そうね……妥当な判断かも。まぁ、その、助かったわ……それで、なにしに来たのよ？　こんなところまで」

「間違ったことを謝りに。あと、ちゃんとしたほうを渡しにな」

「え？」

　わずかな月明かりのなか、ランディが紙袋を差し出す。

「こっちが、本当の昇進祝いだ。さっき渡したやつは……支援課ビルを出るときに間違えて持ってきちまったらしい」

「ま、間違えて⁉」

「ツァイトのためにキー坊がねだって、ロイドが買ってきたんだと」

　名前だけは、前にランディから聞いたことがあった。

「たしか、警察犬よね、ツァイトって」

「そういや、見たことなかったか？　なんにしても、犬用の首輪なんかプレゼントするわけないだろ。変だと思わなかったのか？」

「そりゃ……思ったわよ！」

「言ってくれりゃ、その場で謝って済んだのによ」

「でも、これは、あのとき……自分で判断できなかったことへの皮肉なのかと思って」

　警備隊の上層部に不信感を持っていても、与えられたものが何であるか判断することなく、ただ命令を聞いてしまった。

　その結果、自分は大きな過ちを犯したと思う。

　ランディが肩を落とした。

「はぁ～～～、俺がそんな回りくどい性格かっての。下らない皮肉のために首輪まで用意するかよ」
「も、もしくは、変な趣味でもあるのかと……」
「ない！　おまえは俺を誤解している！　俺はいたって健全な色男なんだからな！」
「……うん」
「あ～いや、色男ってところは、笑っていいんだぞ？」
「え？　あは……なによ、いつも自分で言ってるくせに！　えっと……それじゃあ、返すわね」
　ずっと握りしめていた首輪入りの紙袋を返す。
　そして、改めてランディからプレゼントを受け取った。
「……あ……あり……」
「お礼を言うのは、見てからにしてくれや」
「そうする」
　紙袋を開く。
　夜の暗闇のなかでは黒色に見えるが、おそらくは藍色をした宝石箱だろう。
「あ、開けるわね」
「おう」
　おそるおそる開いた。
　月明かりに照らされて、銀色に輝く。
　それは、素敵なブローチだった。
　中央に緑色の宝石がはまっていて、夜空の星をもらったかのよう。
「これ……私に……？」
「さすがに、これで間違ってたら、俺はウルスラ病院で看てもらってくるぜ」
「あはっ」
　先ほどまでの暗い気持ちが、一気に吹き飛んでいた。
　じめじめして、不気味だった夜の街道が、ロマンチックにさえ思える。
「あはは……やだ、そんな……いいの？　本当に？　もう返さないわよ？」
「そんなに気に入ったか」
「えっ⁉　あ、いえ、そ、そ、そういうわけじゃ……せっかく選んでくれたから受け取るのよ。そ、それだけなんだからね⁉」
「おう、無くしたりすんなよ」
「子どもじゃないんだから大丈夫よ」
　たしかに、つけていたら、壊したり、なくしたりしそうだ。
　自分は、そういうところがある。
　凝った意匠で綺麗だけれど、階級章のように金属の板というわけではない。あまり頑丈ではないだろう。
　いざというときだけ使うようにして、大切にしまっておこ



う、と思う。
「……いざというときが……あるといいけどなぁ」
「ん？　どうした？」
「あ、いえ、なんでもないの」
「ふぅ～、とにかく、市内のほうへ戻ろうぜ。ここからタングラム門じゃ遠すぎるし。途中のバス停までだって、かなりの距離だ」
「うん」
「百貨店の靴屋に行くか？　まだやってるはずだし」
「そうね。はだしで帰ったら、なにがあったかと驚かれちゃいそう」
「よし、市内まで背負ってやるよ」
「えっ⁉　へ、へいきよ！」
「無理するなって、こんな石だらけのとこ、危ねえ」
「だいじょ……あっ⁉」
　また左足に痛みを感じて、ミレイユはバランスを崩した。
　こんどは伸びてきた手に支えられる。
　抱きとめられて。
　すぐ目の前に、ランディの顔があった。
　心臓の鼓動が加速する。
「あ、あの……」
「なんだ？」
「……ありがとう」
　夜の鉄橋を風が吹き抜けていった。

第7話『ランディのプレゼント』了



《輝く環オーリオール》の封印を解く為のゴスペルの実験は全て完了し
計画は第三段階へと入ろうとしていた
ゴォ
オォ
うふふ
ねぇ
レーヴェはどう思う？


エステルは結社に入ってくれるかしら？
空の軌跡 外伝
レーヴェ物語
第十五話
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ


フフ…
健気なものだな


ヨシュアの姿をちらつかせるだけで
こうも簡単に飛び込んでくるとは
……
そこまでヨシュアを想ってくれるなんて
兄代わりの君としてが嬉しいのではないかね？
フフ…
そろそろ到着するようだ


可愛いお嬢さんがね


…アルバ教授
やっぱりあなただったんだ
大佐をそそのかしてクーデターを起こさせたのも…
各地で《ゴスペル》の実験をして色々な騒ぎを起こさせたのも…
全部…
あんただったわけね…！
──その通り
全ては福音計画のため
計画も第三段階に移行した
もう少しでその正体は万人にあまねく知れ渡ることになる
……
…いや
君はそんなことを聞きにここへ来たわけじゃなかったね
エステル・ブライト
！
……
おや
何をそんなにためらっているのかな？
恐れることはない
勇気をもって訊ねてみたまえ
……


…ヨシュアは どこにいるの？
ヨシュアは 無事…なの…？
ふ
それは 私にも わからない
!! そんなっ…
どうやら 空賊たちと一緒に 画策しているようだが… いまいち動きが つかめなくてね
……
そう… なんだ…
どこまで 頑張ってくれるか 楽しみだよ

…楽しみって…
あぁ… そんなに怖い顔を しないでくれたまえ
私の元に 預けられた時 ヨシュアの心は 崩壊していた
そんな心を再構築 するなど 初めての 試みだったのだ
いわばヨシュアの行動は 私自身の研究の発展形
その成果を 気にかけるのは 研究者として 当然と思わないかね？
…あの 生誕祭の時 ヨシュアに何を 言ったわけ？
封じた記憶を 解除して 真実を教えて あげただけだよ
君の家に 引き取られた彼が 無意識のうちに スパイとして 《結社》に情報を 送っていた事…
そして 彼の情報のおかげで リシャール大佐の クーデターが成功し… 我々の準備が 整ったことをね
……ッ！


そのご褒美として改めて《結社》から解放してあげたんだ
……!!!
…やっと…わかったっ…
ヨシュアがどうして…あの夜…姿を消したのかっ…
自分を取り戻したヨシュアが君たちの前から姿を消すとはね
どうしてあんな顔でさよならって言ったのか…!
それについては遺憾に思っているよ
ッ…


…よくもそんな事が言えるわね…
そんな道を選ぶしかないよう
「さよなら エステル」
ヨシュアを
「さよなら」
追いつめたくせにっ…


全部ッ…
全部アンタのせいじゃないかあぁあッ!!!
あぐっ…
う…
!


やれやれ…
何とも品のない振る舞いだ
そう言うなよ
《白面》に殴りかかれるなんざ並の度胸じゃできねぇはずだぜ
うふふ…
……
あ…
君が《剣聖》のお嬢さんか
!
初めましてかな?
執行者NO.0《道化師》カンパネルラだよ
以後ヨロシク頼むよ
……!!
もう
みんなでエステルを脅かしたらダメじゃない
レン…
ねぇ教授
早く例の話をエステルにしてあげて?
そうさせてもらおうか


どうだろう
エステル君
《身喰らう蛇》に
君も入ってみる気は
ないかね？
へっ…
ごめん
もう一度…
君も
《身喰らう蛇》に
入ってみる気は
ないかと言った
考えても
みたまえ
君が《結社》に
入ればヨシュアも
意地を張らずに
戻ってくると
思わないかね
それは…
そうよ
エステルの望みは
ヨシュアと再会
することよね？
《結社》に入り
さえすれば
その望みは
すぐにでも叶うわ
考えるまでも
ないわよね？
……
でも
パチン
あたし…
この後 我々は
しばらく艦を
留守にする
必要があってね
ガッ
っ！
何!?
帰ってきたら
返事をきかせて
もらおうか
離しなさいよ
ちょっと！



…ワイスマン(あの男)の悪趣味には
付き合いきれん
コッ…
己の享楽の為に計画と無関係な娘まで抱き込むとは…
コッ
コッ
コッ




「ヨシュアはどこにいるの」
「全部」
「アンタのせいじゃないか」
ふ…
エステル・ブライト
剣聖の実直さを受け継いだ娘
ヨシュアの為に自らの危険も省みず
敵陣に乗り込んできた娘…


ッ…
!?
邪魔をするぞ
……
そう警戒するな
先ほどのような考えなしの行動をしない限りお前に危害が及ぶことはしない
うっ…
悪かったわね考えなしで
…俺達の目的が知りたければ教授の誘いに応じたらどうだ?
一通りの情報がわかるだろう
……


…答えは出ているが迷いがあるといった所か
カッ…
!!!
俺個人としてはお前は到底《結社》に向いているとは思えない
カッ
カッ
カッ
──《結社》と関わるには
おまえの闇はあまりに小さすぎる
闇…?
《結社》に属する者は皆 何かしらの闇を背負っている
無論
ヨシュアもな


ヨシュアも…
…ねぇ《剣帝》
あなたとヨシュアって一体どういう関係なの？
エステル・ブライト
ヨシュアと数年共に過ごしただけの
ただの娘


…それを知ったらお前は
真っ白なままでいられなくなる
その覚悟はあるのか？
そんな娘に


俺達の闇など理解できるのか――
…？
……!!

……何をしているんだ俺は
こんな娘に問うて何になる…
――うん
教えて


あたしは…ヨシュアの辿ってきた軌跡を
どうしても知っておきたい
その気持ちだけは本当だから
あたしはどんなことでも受けとめたい！


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ 脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


あたしは…ヨシュアの辿ってきた軌跡を
どうしても知っておきたい
その気持ちだけは本当だから
あたしは
どんなことでも受けとめたい！



# みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

## 魔物と姫様




## 公女と護衛役




## ケダモノ



## 魔物の裏切り




## 宝物



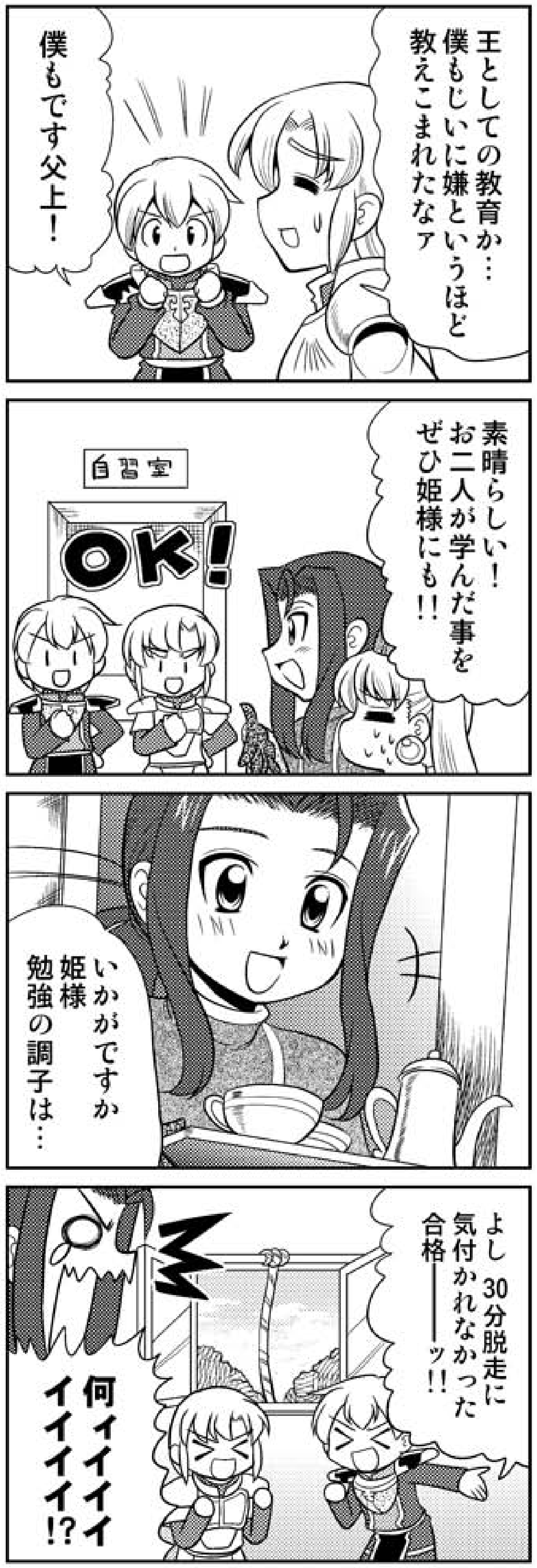

## 例外




## リベール式帝王学



## ファーレーン式帝王学




## 我が家の王族




## 朴念仁




## お兄ちゃんの野望



## 魔物は大変




## 従者達のお茶会




## 待ち合わせ




## 姫様に自由を



# 英雄伝説 空の軌跡
## ～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

### 第5回『思い出は色あせても』

8.

ドロシーは辛うじて悲鳴を呑み込んだ。

とっさの判断だったけれど正解だったと思う。叫んでいたら、宿をひっくり返す騒ぎになっていたはず。

ここは外庭に造られた露天風呂。

確かに木の柵の向こうは森となっていて、裏山へと繋がっているのだけど……。

薄い板張りだけの境とはいえ、目の前で倒れている魔獣はいったいどうやって入ってきたものやら。

だが現に片角のヒツジンは血まみれとなって数歩先に倒れているのだ。

口許に当てていた手をドロシーはゆっくりと胸元へと下ろす。

一歩ずつ。

倒れている片角のヒツジンに近寄る。

ヒツジンがかすかに目を開けた。

――あう。

足が止まってしまう。ひやりと背筋が冷えた。ここで飛び掛ってこられたら、とてもじゃないけれど助からない。相手は魔獣にして凄腕の格闘家で、ドロシーは薄い洗い布一枚を身体に巻きつけただけの姿なのだ。

ヒツジンは黒目がちの瞳でドロシーを見つめてきて、かすかに頭を起こそうとした。

けれども、一度は開いた瞳が力なくふたたび閉じられてしまう。

「大変です……」

最後の距離を駆け寄って、ヒツジンの身体を確かめる。全身に傷をおっていて、いまだに血が止まっていない。

止血が必要だ。

「乾いた布！」

それと薬草だ。確か、旅行用の応急手当のセットが旅行鞄の中にあったはず。

人間用だけど。

この際、そんな些細なことを気にしてる場合じゃない。

相手は同じ二足歩行の生き物なのだし、ジンさんと戦ったほどの格闘家だし、人間用の薬だって効くかもしれないじゃないか。たぶん。

「待っててください。いま、お薬とってきます！」

押し殺した声でそう言って、ドロシーは踵を返した。

身体をくるんでいた洗い布を魔獣に掛けていかないだけの落ち着きは残っていた。恥ずかしいから、ではない。濡れた布が風に当たると水気を失い急激に熱を奪うのだ。

けれど、薄い布一枚でも身体をくるんでいたのが、安心感に繋がって、それが返って仇になったのかもしれない。

それとも、思った以上に動転していたか。

洗い場を越えて、脱衣所を越えて、東方風の布のカーテン越しに「センパイ！」と叫んだ。

切羽詰った声に、ナイアル・バーンズが慌てて飛び出てくる。

「どうし――なっ！」

「へ？　あ！」

洗い布一枚で身体をくるんだだけ、濡れた髪のまま廊下でドロシーは「しまったぁ」と思わず声をあげてしまう。

ドロシーの姿に驚いてすっころんだナイアルが後頭部を床で強打した。

目を回している。

――無駄に怪我人を増やしてしまいました……。

9.

露天風呂は男湯からも女湯からも繋がっている。

それが幸いした。ドロシーは応急手当のセットを部屋から持ってきて、裏庭のここでナイアルと待ち合わせた。

傷ついているとはいえ、さすがに魔獣を宿の中に運ぶわけにもいかなかったからだ。さりとて、ドロシーにはそのままヒツジンを見捨てることもできなかった。

毛についた血をぬぐってやり、傷痕を水で洗い流す。ひどかったのがお腹の傷で、深く、えぐれたようになっており、

麻酔などない中で、ナイアルが裁縫用の糸と針を使って縫い合わせなくてはならなかった。
　ろくな明かりもない中で。
　――先輩、お針子になれます！　すごい器用。
　痛かったろうに、ヒツジンは時折りうめき声をあげるだけで我慢した。
「こいつは獣と戦った傷だな」
　ナイアルが言った。
「獣、ですか」
「でかい角でひとつき、ってところだ。《不動のジン》と互角に戦った奴をここまで手ひどく痛めつける獣ってのが気になるが。大型の魔獣あたりか。っと、よし！　おい、布！」
「は、はい！」
　縫い合わせている間にも滲み出ていた血を乾いた清潔な布でぬぐう。《紅葉亭》の飾り文字が躍る東方風の拭き布がたちまち血で染まってしまった。
　――これは洗って落ちるでしょうか……。
　手持ちの布は尽きてしまったから仕方ないが、買い取らないと女将さんに申し訳ない気がする。
　傷に効く軟膏を塗ってやり、薬草を貼り付けたまま包帯を巻く。
　もこもこした毛並みが邪魔をするところは、可哀想だがいくらか毛を刈り取らなければならなかった。羊という動物は毛を刈ると、とても情けない姿になる……。いやこれは羊じゃなくて、ヒツジンだけど。
　ひととおりの手当てが済むと、ナイアルとふたりがかりで抱えあげて、やわらかい草地の上に寝かせた。
　ヒツジンは黙ってされるがままになっていた。
「もう、暴れませんね……」
「覚悟したってことだろうな」
　声を低めて語り合う。
　ナイアルを連れてドロシーが戻ってきたとき、片角のヒツジンは警戒したのだろう。最初は近づこうとするふたりを追い払うような仕草をしたのだ。
　懸命にやわらかい声を出してなだめた。
　言葉が通じたとは思えない。力尽きたのだ。両腕を振り回していたヒツジンだったが、ひと声大きく唸ってから、がっくりと力を抜いた。
　で――応急手当へとこぎつけたわけだ。
　今は目を閉じて黙ったまま寝ている。少し、呼吸も穏やかになったような気が、する。
「まあ、今夜が峠ってやつだな。血はなんとか止まったみてえだし、朝までひどくならなけりゃ、命は助かる」
「よかったですよぅ」

　――ひと安心です。
　ほっと安堵の息をついた。
　それにしても……。
「どうして、こんなところに逃げて来たんでしょう」
　周りが森だとはいえ、ここは村の中だ。つまり人里だ。魔獣といえども、傷ついている身体では近寄りたくないだろうに。
「匂いだな」
「……へ？」
「この腐った卵みてえな匂いだよ」
「……温泉の？」
　そうだ、とナイアルが頷く。
「どこだったかな。場所は覚えてねえが、山の中の温泉に猿とか獣が入りにくるってぇ記事を読んだことがある」
「へー」
「人間だって、湯治に来るだろ」
「そうです、けど。じゃあ、温泉に入りにきたんですか、この子？」
「本能だろうけどな」
　考えてのこととは思えない。止血もせずに、血を流したまま湯船に浸かることなどできないわけだし。そうナイアルは言った。
「はあ」
　頷きつつ、つい、ドロシーはヒツジンがタオルを頭に乗せて湯に浸かっている姿を想像してしまった。
　ついでに想像の中で横にジンさんを並べてみた。
　ふたりして鼻歌なんか歌ってたり。
　……ほう。なんだか、ほのぼのですよー。
「いや、そんなことを考えている場合ではないのでした！」
「叫ぶな。頭いてえんだから」
　ナイアルが頭に貼った湿布を手で押さえた。廊下で強打したところだ。大きなこぶになっている。
「ああ。もうしわけありません」
「まあいいけどな」
「見られたのでおあいこってことで」
「見てねえ！」
「先輩、うるさいですよぅ」
「……おまえな」
「冗談ですよ？」
「わかってるっーの」
　草地にふたりで座り込みながら、そんな軽いやりとりを交し合う。魔獣相手に医者の真似事をしていた緊張感から解放されたせいか会話になってない会話だったり。
「ま。確かにここでうるさくしてると、治るものも治らねえし。

静かに寝かせておいてやろう」
「ですねー」
　立ち上がってふたりして宿のほうへと向かった。
　茂みが邪魔をしてその草地は旅館の中からは見えない。意識を取り戻せば、そのまま逃げられる場所だ。そっとしておくほうがいい。
　とはいえ……このまま放っておく、というつもりはなかった。
　ヒツジンの傍を離れつつ、ドロシーはナイアルと互いに目配せをする。
　どうして、あんな傷を負ったのか。
　ふたりは突き止める気になっていた。
　それに捜していた相手なのだ。ここで別れたら、もう見つけられないかもしれない。

10.

「動いたぜ……」
　まどろみに落ちそうになっていた意識が、ナイアルの言葉で引っ張り上げられる。
　茂み越しに、よろりと立ち上がるヒツジンの姿が見えた。
「大丈夫なんでしょうか」
　ささやき声で問いかける。
「魔獣だからな」
「そっか。鍛えてますもんねー」
　ジンがそう言っていたことを思い出した。
「いやそれはおかしいだろ」
　ナイアルが反論してきたが、今はそれどころではない。
　後をつけねば。
　隣でナイアルが、全ての魔獣が熱心な格闘家なわけではないからそれは理屈が通らないとかぶつぶつと言っていたが。
　――細かいことは後回しです！
　もちろんドロシーもナイアルも、追いかける準備は整えてある。
「垣根が壊れてやがる」
　森に面して建てられた柵の一部が壊れている。ヒツジンが壊して入ってきたのか、それとも元々壊れていたのかは判らない。
　――後で女将さんに言っておかなくちゃ。ドロシーは心の中のメモ帳に書きつけた。
　ヒツジンは壊れた垣根を抜け、裏の森のほうへ。
　ドロシーたちも続く。
　垣根の一部に服の裾を引っ掛けてちょっと焦ったけれど、小さなかぎ裂きを作っただけでなんとか抜けた。



「おうちに帰るんでしょうか……」
「さて……」
　夜明けが近づいていた。東の空に薄明が始まっている。
　丘が稜線に沿って輝いていた。白く縁取りされて、墨絵のように山並みが浮かびあがっている。あの向こうにお日様が出番を窺っているのだ。
　足下に気をつけながら進んだ。
　気づかれないようにと手持ちの導力灯さえ灯していない。
　宿の背後は木に覆われた丘になっていて、さほど傾斜はないとはいえ、ヒツジンの後を追うのは大変だった。
　相手は魔獣なのだ。街道など通るはずもない。うっかりしてた。
　それでも後を追うことが可能だったのは、片角のヒツジンの傷が深く、よろよろとよろけながらのゆっくりとした歩みだったからである。いつ倒れてもおかしくない様子だったからハラハラしてしまう。
　丘を越え、下りになり、ヒツジンは東から北へと進む方法を変える。歩く速度がわずかに速まった。すこし苦しそうだ。追いかけるドロシーたちの息もあがりはじめた。
　平らな草の原へと辿りつく。
　トラット平原。
　朝日が顔を覗かせる。
　緑の草地が目の前をゆるく下っていた。その中を白いぽつんとした影が進んでいる。
　隠れるところのない平原だ。少し距離を開けて追いかける。
　やがて――。
　もこもことした白い花畑というか、綿花の畑というか、芒の原というか、そんな一角が見えてきて。
　なんだ？　と、一瞬追いかける足が止まった。じっと見ていて、勘違いに気づく。
　もこもこが蠢いていた。
　草が風になびくような動きではない。もっとこう――複雑に波打つような。
　その蠢く大きな白い塊の中に片角のヒツジンが入ってゆく。大柄な片角の格闘家ヒツジンは、塊の中で頭ひとつ抜き出ている。
　幾つもの鳴き声があがった。「エェェェエ」という声が空気を震わせて響き渡る。
「おい、待てあれって」
　ナイアルが慌てる。ドロシーもぞくりと鳥肌を立ててその場で立ちすくむ。
　――あれって、まさかまさかですけど！
　嫌な予感。だが見えている光景はそのまさかなのだ。
　綿花の畑なんかじゃない。

あれは――くっつきあっているから大きな塊に見えただけの。

百を楽に越えてそうな……ヒツジンの群れだ！

眩暈がした。

なんということ。ドロシーたちは、彼らの村にやってきてしまったのだ！

「おい。倒れたぞ！」

「えっ」

ナイアルの言葉に慌てて視線を最初に追っていたあのヒツジンに戻す。群れから頭ひとつ抜けていた姿が見えない。埋もれてしまっている。

ナイアルの言うように倒れてしまったのだ！

せっかく助けたのに、と心配している余裕は実のところ、ドロシーたちにはなくなってしまっていた。

エェェェェ！

エェエェ！

エェェェェェエ！

そんな、たくさんのヒツジンの鳴き声と、土煙をあげて草原をこちらに向かって全力で駆けてくる白い塊たち。

「やべぇ！　逃げるぞ、ドロシー！」

ふたりとも即座に背中を向けて逃げ出そうとしたのだけれど、あっという間に回り込まれてしまった！

11.

当然ながら、ヒツジンに囲まれたのは生まれて初めてだ。

直接ではないが戦ったことはある。先日の、ジンや、見習い遊撃士コンビ、つまりエステルとヨシュアとヒツジンを探して街道沿いを歩いたときも、野良のヒツジンとは戦いになった。けれど、それでも相手は四匹とか、せいぜい五匹あたりだ。

だが今や、ナイアルとドロシーは、ぎっしりと隙間なく囲まれてしまっていた。

二十匹以上はいる。

「唐突ですが、先輩。ヒツジンって『匹』でいいんでしょうか。それとも『頭』ですか。はて？」

「三を越えたら、『いっぱい』でいいんじゃねえかな」

「あー、なるほど。それはいい案ですよぅ。先輩さすがです！」

「そりゃどうも」

とか、軽口でも言わねば精神が持たない状況だ。

完全に命の危機だった。

どのヒツジンも目が血走っていた。ぎらぎらとした瞳で見つめてきていて、じりじりと輪を狭めてくる。まるで親の仇でも見るかのような目つきだ。

ひょっとして……恨まれてる？

「えっと……」

あの格闘家ヒツジンが傷だらけで帰ってきて、その後をドロシーたちが追っていた。

つまり――。

襲ったヤツが　↓　止めをさそうと追いかけてきた。

そういう結論だろうか。

「わ、わたしたちがあの子を傷つけたわけじゃないですよぅ！」

「ってな言葉が通じてくれりゃいいんだけどな！」

通じそうもなかった。

両手を前に突き出して、ちがうちがうと手を振ってみたが、ボディランゲージもどうやら効果なさげ。

これは困った。

口の中がからからに乾いてしまう。もうだめだ。思ったら、自然と手は自分の鞄へと伸びていて、カメラを引っ張り出していたのには我ながら驚いてしまう。

「おまえ。それで何を写す気だよ」

ナイアル先輩の声も呆れた調子になっている。

「自分でもよくわかりません！」

「ったく。なんてぇ、カメラ馬鹿だよ。しょうがねぇ。こうなったら、なんとかお前だけでも……」

ナイアル先輩が何か言おうとしたときだ。

囲んでいた輪の一角が切れた。

自然に左右に分かれて、空いた隙間をぬっと一体のヒツジンが姿を見せたのだ。

周りのヒツジンたちよりも、飛びぬけて背が高い。

頭の左右のくるりと丸まった角の片方が折れていた。

なにより全身のあちこちにぐるぐると巻かれた包帯の数々。

それは、ドロシーたちが手当てしたあの片角の格闘家ヒツジンだったのだ。

一歩前に出ると、蹄をドロシーたちに向けながら、仲間たちに向かって、ひとことふたこと叫ぶ。

一匹のヒツジンが抗議をあげるかのように啼いたが、片角のヒツジンが叫び返すと、ぴたりと口をつぐんだ。

「こいつはもしかして……」

ナイアル先輩が期待を込めた瞳で事態を見守っている。

と、そのとき輪のもう一箇所が切れた。

姿を見せたのは、ずいぶんと年老いたヒツジンだった。

「長老……ってとこか……」

ナイアルが言った。

年老いているとわかるのは、全身の毛が薄くなってヒツジン特有の毛並みのモフモフ感がなくなっているからだ。身体も折れ曲がって小さくなっている。
　だが、瞳の鋭さだけは失っていない。
　その老ヒツジンはゆっくりと格闘家ヒツジンのところへと歩みよると、ぽんぽんと優しく身体を叩いた。労わるように。
　それから、「エエエ」としわがれた声で輪になっているヒツジンたちに叫ぶ。
　すっ、とヒツジンたちから猛々しい雰囲気が消えたのを感じる。
「なるほど……確かに長老さんみたいですよ……」
　これで杖でもついていたら、さぞかしお似合いだったろう。だが、さすがにヒツジンにはそういう文化はないようだ。魔獣だし。
　輪が解けた。
　老ヒツジン――ここは長老ヒツジンと呼んでおこう――が、蹄をくいっと手前に引いて、ドロシーたちを促した。
「ついてこい、って言ってるみたいだな」
「はい……」
　さすがに逆らう気にはなれない。敵意を見せなくなったとはいえ、まだ大勢のヒツジンたちがドロシーたちの一挙手一投足をじっと見つめているのだ。
　並んで歩く格闘家ヒツジンと長老ヒツジンの背中を追いかける。
　こうしてドロシーとナイアルは、おそらくは世界で初めてヒツジンの一族たちに招待されることになり――。
　格闘家の彼が大怪我を負った原因を知ることになった。

## 12.

　トラット平原のヒツジンの中に格闘好きな一族がいる。
《不動のジン》が確かそう言っていた。
　おそらくはそれなりの激しい稽古を重ねているはずだ。とも。が、しかし、それがまさかこういうことだとは思わなかった。
　ヒツジンたちの群れの中に招き入れられたドロシーたちだが、すぐに何かされるというわけではなかった。
　むしろほうっておかれてしまった。
　ヒツジンたちはいっせいに稽古を始めてしまったのだ。
　互いに距離をとると、格闘の演舞のような動きを繰り返している。
　右の蹄を腰元に引いてから突き出す。次は左。左右の蹴りを上段、中段、下段と仮想の敵に向かって繰り出してから、くるっと背中を向けて回し蹴り。
　それで一セット。数回繰り返してから、今度は別の型を始める。
　大勢のヒツジンたちが、「エエ！」「エッ！」「エエエエ！」と声を上げながら、稽古を続けている。見てて壮観だ。
　確かにこれは格闘好きな一族だ。
　――なるほど、あの遠目から見たときのうぞうぞとした動きはこれか！
　ひとつ謎が解けた。
「早朝稽古ってところか……」
「これ、毎日やってるんでしょうか」
「だろうな。足下を見ろよ」
「へ？」
　ヒツジンたちの練習場の地面には草が生えていない。なるほど、毎日、こんな稽古を繰り返している証拠だ。
「この子たちって……草を食べるんじゃ……」
「だからだろ。決まった場所でやらねーと、食いもんがなくなるじゃねえか」
「あ、なる……」
　ってことは意外とこの子たち賢いのではないだろうか。
「エエエ」
　声を掛けられた。振り返ると、子どものヒツジンがいた。明らかに小さい。おとなのヒツジンの半分ほどしかなかった。黒目が大きくて可愛いっ！
　両手で何かを抱えていて、ドロシーに向かって差し出してくる。
「これは……」
「食えってことじゃねーか？」
「う……これをですか？」
　葉っぱだった。たぶん、ロイヤルリーフ。お菓子の風味付けに使われるやつ。間違っても、生で大量に食べるものではない。せめてサンドイッチに挟むとか、サラダにするならばともかく。これを食えと？
「知ってるか？　たいていの異文化交流の基本は出された食い物を断らないこと、だぞ。同じ釜の飯、って言い方があるだろ。同じものを食う奴は仲間。食わない奴は敵ってことだな」
「ええと、その」
「ちょっとでいいから口に入れとけ。俺は食うぞ。死にたくねーからな」
　どかっと腰を下ろして、ナイアルがロイヤルリーフを掴む。

「食べます。わたしも食べますってば！　食べますよぅ！」
　隣に腰を下ろして、慌ててドロシーも一枚にかぶりついた。
　少々硬いが我慢だ。なんとか噛み砕く。
　その途端に鼻に抜けるような青臭い味が口いっぱいに広がった。
「うぇぇぇえ。おいしくないぃぃい！」
「うっ。こいつは想像以上だな。野生のやつは香りも強いし……」
「エエ？」
　――ん？
　なんで、この子びっくりしてるの？
　その子の後ろから、もう一匹の子ヒツジンが現れて、どさどさとドロシーたちの前に抱えたものを下ろした。
　完熟したリンゴ、オレンジ、トマト（天然のだから苦くない！）……。
　あまぁいフルーツの数々……。
　――あれ？　あれあれえ？
「おまえさんたち、なんでそんなもんを口いっぱいに頬張ってるんだ？　そいつはここじゃ薬草代わりだぞ」
　ごっくん！
　声にびっくりして、口の中のものを呑みこんでしまった！
　うう、激、まずいですー。でもそういえば、ロイヤルリーフは薬草茶のレシピで見たような……いや、それよりこの声は！
　その男は、ぬっと大きな熊のような身体を乗り出して、腰を下ろしたドロシーとナイアルのふたりを覗き込んでくる。
「ふ、《不動のジン》！」
　ナイアルの叫びに、にっと口の端をあげて、熊のような大男が笑った。

## 13.

「稽古の場所を探したんだ。格闘好きな一族なら、それなりの鍛錬場を必要とするだろうと睨んでな」
　リンゴを皮ごと丸かじりしながらジンが言った。
　まだ日が昇る前から、だそうだ。
　ドロシーたちと合流する前に探し出すつもりだったのだろう。
　あの片角のヒツジンと出会ったあたりから、街道沿いを丹念に歩いて見つけたそうだ。
　なるほど、と思いつつ。別の感想も持ってしまう。
「よく、無事だったな、おい」
　ナイアル先輩が代弁してくれた。
　格闘家の集団であるこの一族と出会って、何もなかったというのが信じられない。
　ドロシーたちなど、もう少しで叩きのめされるところだったのに。
「武の道は、異なる道を歩こうとも目指す頂は同じだからなぁ。戦って、勝つ。それだけだ。わかるだろう？」
　同意を促すように答えになってない答えを返してくる。
　――いえ、その真理は申し訳ないのですがまったくわからなく……。
　ナイアルが妙に達観した表情になって「そういうもんか」とだけ言った。
「だが、あのヒツジンがいなかったんでな。違う一族かと思ったが、まさか、おまえさんたちのいる温泉に行っていたとはな」
「ひどい怪我でしたよぅ」
「うむ……」
　ジンさんが唸った。
「おまえさんたち、気づいたかい？」
「は？」
「ええと……何がですかー？」
「この群れの事だ。よく見てみると、年寄りと子どもばかり。若者のヒツジンもいるにはいるが……」
　そう言いながら、ジンが、稽古を済ませて食事をしているヒツジンたちを見やる。
　ドロシーとナイアルも自然と彼らを眺めることになり。
「そういえば……」
　小さなヒツジンたちが子どもたちだというのは大きさでわかる。残った大きなヒツジンたちが、年老いているかどうかは、最初は気づかなかった。
　けれど、注意してみるとわかってくる。
　確かに長老ほどではないにしろ、毛並みが艶を失っていたり、やや背中を丸めていたりしているものが多い。羊のように四本の足で平原を駆けていたら、腰が曲がったりなどはしないのだろうが……。直立歩行すると、人間みたいな老化が出てくるわけだ。
　そして、まれにいる若者ヒツジンらしきものたちだが。
「怪我、してますよ……」
「ああ。あれは戦いの痕だな」
「あの片角のやつも、ひどい怪我だったぜ。でかい角でやられたような傷があったが……」
　ナイアルが言った。
「おそらく、敵、だな」
「敵……ですか」
《不動のジン》の瞳がぎらりと光る。
「うむ。かなり大きな魔獣の類だろう。この一族はそいつに

狙われている。何度も襲われて、おそらくはその度に……」

　戦いを挑んだ若いものたちから順にやられてしまった、ということか。それで若ヒツジンの数が少ないわけだ。

「それじゃ、ひょっとしてあの片角のヒツジンも……」

「そいつに挑んだのだろうな。おそらく。奴はこの一族で最も強い。だからこそ、ここまで生き延びてきたし、今回も生き延びたわけだ」

「死に掛けてましたよぅ！」

　思わず声が震えた。

　ドロシーたちが見つけなければ、そのまま死んでいたかもしれないのだ。

「おそろしく底意地の悪い敵だ。なぶるようにして、少しずつこの一族を弱めているのだろう。そして最後には……」

「こ、ここから逃げるわけには……いかないんですか？」

「安全なだけの場所を求めても、餌場が遠くなれば、生き延びるのは難しくなる。それに、子どもと年寄りばかりでは、いたずらに彷徨うのは……」

　ドロシーたちの前に子ヒツジンたちがやってくる。

　くりくりとした瞳でドロシーの前にあるフルーツの山と、ドロシーとを交互に見つめてきた。

「食べます？　わたし、もうお腹いっぱいだから、もっていっていいですよー」

　言葉が通じたとは思えないが、子ヒツジンたちは小さな声で鳴きながら、フルーツをうれしそうに抱えてもっていった。

　思わずなごんでしまう。

　緩んだ頬が、けれど、一瞬後に引きつった。

　エエエエエ！　と、群れの端のほうで悲鳴のような声があがった。

「現れた、か」

　まなざしの方向へと目を向ければ、忽然と山が出現していた。

　いや――違う。

　あの山は動いている。

　小山のように見えたのは大型の動物だったのだ。

　全身を覆う鎧のように盛りあがった灰色の硬い皮膚。大きく反り返った角を鼻の上にいだき、四本の丸太のように太い足を踏み鳴らして近づいてくる。

「クロノサイダーか！」

　うめくようにナイアルが言った。

　クロノサイダー。

　トラット平原に時折り出現するという大型の魔獣だ。

　最悪の敵だった。弱点らしき弱点もなく、しばしば遊撃士協会に手配書が出回る危険な相手。旅人たちの天敵でもある。

　しかも、現れた奴は見上げるほども大きくて、角の先は建物の二階に届いてしまいそうなほどの高さがあった。

「あいつ、まだ治ってないのに！」

「それが武道家ってもんさ」

　ナイアルとジンの言葉に目を向ければ、蜘蛛の子を散らすように逃げ始めた群れの中で、たったひとり流れに逆らって魔獣に向かって歩いていくヒツジンがいる。

　片角の格闘家ヒツジンだった。

「護るものがあるうちは、敵に背中は見せられんのさ」

　ジンが言った。

　そして、《不動のジン》はゆらりと立ち上がるのだ。

「行くのか」

「ああ。あのヒツジン、ここで死なせるには惜しいんでな」

「で、でも、アレってば、ジンさんの三倍くらいの大きさがありますよ！」

「そうだな」

　ジンが言った。

「だから、どうした――と言っておこうか。血がたぎる。面白いじゃないか」

　そう言って、にっと笑うのだから、武道家というのは訳がわからない。無茶ですよぅ。

「できるかどうかではないのさ。やるかやらないかだよ」

　ジンが言って、それで止めることができなくなった。

　なによりも――ジンは遊撃士なのだ。

　困っている人がいたら助ける。

　それが遊撃士というものだから。止められない。止めてはいけない。

　人ではなくて今回は相手がヒツジンではあったけれど。

14.

　片角のヒツジンがゆっくりとクロノサイダーへと近づいてゆく。

　己に近づいてくる輩にようやく気づいて、巨大な魔獣の歩みが止まった。

　睥睨するかのように、相手を見下ろした。

　そんなはずはないのに、見つめているドロシーには、クロノサイダーが嗤ったように見えた。

　片角のヒツジンは恐れることなく歩を進める。

　身体に巻いていた包帯がはずれて、片端が風になびいている。身体にまとわりつく外れかけた包帯をヒツジンはほどいて捨てる。風が血に染まった帯をさらって飛ばした。

　十歩ほどの距離を置いて立ち止まり、魔獣を睨みあげる。

　涼しげな瞳は覚悟を決めた者のそれだ。

　腰を落とし、格闘家のヒツジンは裂ぱくの気合を放った。

エェェェェェェエッ！

その声を合図に戦いが始まった！

クロノサイダーの片足が、ヒツジンの頭の上まで持ち上がった。

そのまま勢いよく落とす。

頭の上から、身体より大きな金槌が降ってくるようなものだ。それをぎりぎりでヒツジンはかわした。

背中を向けて回りながら、残した脚のほうへと近づき、肘打ちを叩き込む。

打って、すぐに離れた。

「効いてない⁉」

ドロシーは思わず叫んでしまった。

クロノサイダーはぴくりとも動かなかったし声さえあげなかった。

「まあ、クロノサイダーの皮は《黄金の鎧》なんて言われるくらいだからなぁ」

「セ、センパイってば、何を悠長に！」

「慌てるなって、ほれ、助っ人が参戦したぜ」

辿りついたジンが、駆け寄った勢いのまま飛び上がり、魔獣の腹に拳を叩き込んだのだ。

「一発じゃねえぞ、あれ！」

「五発でした」

「よく見えるな」

感心した声で言われてしまったが、ドロシーは見るだけならばなんということもない。

回る風車の羽の数を数えて驚かれたこともあるくらいだ。

ジンの五連撃に、さすがのクロノサイダーも多少は堪えたようで、わずかに身体を傾けた。

横から入ってきたジンにヒツジンが気づいた。

ちら、と視線を交し合う。

それも一瞬のこと。すぐに互いに離れた。逆方向にだ。そこから勢いをつけてクロノサイダーの両のわき腹へとふたり同時に飛び蹴りを放った。

グォオ、と魔獣が始めて声をあげる。

「やった！」

「いや、まだだ！」

巨大な魔獣は頭を左右に振り、今度は長い角でヒツジンとジンを狙った。

ジンは軽くよけてみせたが、怪我を負っている格闘家は逃げ遅れてしまう。

「ああ！」

角に引っ掛けられ、ヒツジンの身体が宙に浮いた。



十アージュほども吹っ飛ばされ、草原に叩きつけられる。身体が跳ねて、二、三アージュほど転がった。

それを見てとると、クロノサイダーの視線はヒツジンだけに向いた。

――あの魔獣、弱いほうから！

「って、おい。ドロシー！」

ナイアルの声を無視して、ドロシーはカメラを掴んで走り出していた。

「お、おい。無茶だろ！」

追いかけてくる先輩記者に向かって声だけ返す。

できるかどうかなんて知らない。でも――

「これができるのは、わたしだけですから、だからわたしがやらないと――」

「ちっ！」

舌打ちひとつで止めるのをやめて並んで走ってくれるんだから、ナイアル・バーンズはお人よしだ。そこがいいところなんだけど。

「あいつらの邪魔になるようなら、おまえの襟首ひっつかんで逃げるからな！」

「わかってます！」

クロノサイダーはジンを無視して片角ヒツジンのほうへと向きを変えた。

十アージュは魔獣には三歩か四歩の距離だ。そして、地面に叩きつけられたヒツジンはまだ起き上がってこない。

クロノサイダーが邪魔な虫を踏み潰すべく足を上げた。

――させません！

オーバルカメラの夜間用の閃光機能のボタンを押し込む。

「センパイ！」

「おう！」

ナイアルが小石を拾って魔獣の顔をめがけて投げつけた。

痛くなどないだろう。葉っぱで撫でられたくらいの感じに違いない。それでも気になったとみえて、一瞬だけクロノサイダーの顔がこちらに向く。

――今だ！

魔獣の顔を狙ってシャッターを切った。

青空の中にある太陽とは別に、もうひとつの太陽が一瞬だけ現れてクロノサイダーの目を焼いた。

苦悶の声を上げてクロノサイダーが顔をのけぞらせる。

まともに光を見てしまったのだ。

怒りの声をあげ、魔獣がドロシーを見やる。

こちらに向かって突進してきた！

「って、そこまで怒りますか！」

「あたりまえだろ、馬鹿。逃げるぞ！」

無理だ。それがわかってしまう。この距離ではとても逃げ

られない。まるで時間の流れがゆっくりになったみたいに感じた。
小山のような巨体が視界の中いっぱいになって近づいてくる。
頭を低く下げ、角をわざと地面すれすれにして突っ込んでくる。あの角でドロシーを串刺しにするつもりなのだ。
ああ、だめだ。
これは死んだかも。
ドロシーの身体は恐怖に縛られて動けない。
距離、もうわずか三アージュ。いやもう、二、一……。
尖った角の先がドロシーに触れようとする直前に、何かが視界の中に入りこんでいた。
大きな影が目の前に現れて、魔獣の姿をふさいだのだ。
「ジン……さん……」
大きな影がジンの背中だと気づいた。
それと同時だ。襟元を掴まれて強引に引っ張られた。目の前からジンの背中が消える。
いや、ドロシーのほうが転がったのだ。ナイアルに首根っこを掴まれて強引に地面に引き倒された。
間一髪。
鈍い衝撃音とともに、土煙があがった。
たった今までドロシーがいた場所の大地がえぐれて深い溝を作っていた。二本の溝は五アージュほど続いたところで、ジンの足下に繋がっていた。
「ジンさん！」
ドロシーの悲鳴があがる。
ジンは両手で角を抱きかかえるようにして掴んでいた。まともに魔獣の突進を受けてみせて、堪えたのだ。傷を負ってないのが不思議なくらいだ。地面を掘った五アージュの溝が魔獣の勢いを消すまでに必要とされた距離だった。
「おおおおお」
ジンが吼える。
クロノサイダーの頭の角を掴んだまま力比べをしているのだ。
自らの身体の三倍はあろうかという魔獣と。
「そんな無茶……」
「いや……。ドロシー、見てろよ。なぜあいつが《不動の》ジンと呼ばれるかがわかると思うぜ」
ナイアルが言った。
「おおおおおおおおおお！」
ジンが吼える。両の足は、削った地面を捉えてもう離さない。クロノサイダーは角を振りほどこうとしているようだが、まるで角を地面に突き刺してしまったかのように動かせないでいた。

まさに《不動》。
大地を味方につけたかのように、ジンの身体は動かない。
それどころか――。
――えっ……うそ。
両腕で掴んだ角を、ジンはじりじりと斜めに引き倒している。
あのまま力を入れれば――。
「おおおおおおおおおおおおおおおりゃああ！」
鈍い音があがった。
「角が！」
折れてしまった！
中ほどで折れて、クロノサイダーが今までに倍する悲鳴をあげる。抱えた角の片割れをジンは投げ捨てた。
「これで……対等だろう？」
ジンが声をかけた相手は、ヒツジンだ。
ようやく起き上がってきた片角のヒツジンが、まるでジンの言葉を理解したかのように一度だけ深く頷いた。
「では、行くぞ」
ジンが言って、ヒツジンが応えるように「エエエッ」と鳴いた。
今度もふたり同時だ。
駆け寄って飛び上がると、拳を魔獣の顔の両側から叩き込んだ。
その数――片手で五回。両腕で十回。それがふたりぶんで、合計二十回。ほぼ一瞬ですべて打ち込まれて、それで勝負がついた。
交差するようにしてジンとヒツジンが大地に飛び下りて魔獣に背中を向ける。
ふたりの背後で、魔獣の小山のような巨体がゆっくりと倒れた。

こうして、トラット平原に住む格闘家ヒツジンの一族に平和が戻ったのだ。

エピローグ.

じゃあねー、とドロシーは彼らに向かって言った。
言葉が通じているようには見えなかったけれど、言わんとすることは伝わったのだろう。特に子ヒツジンたちが寂しそうな瞳でドロシーを見てる。
ドロシーもちょっとだけ寂しかった。
そうだ、と思いつく。
別れる前に、これは言っておかなくちゃ。
「あのですね。人間に悪さをしちゃだめですよー。悪いこと

したら、遊撃士があなたたちの尻尾を切っちゃいますからね！」

「こいつら、こっちの言葉がわかってるようには見えないけどな」

ナイアルがせっかくの言葉に水を挿してくる。

「それでも……俺はあいつだけは人を襲わんと思う」

《不動のジン》が、長老の傍らに立つ《片角のヒツジン》を見ながら言った。

「わたしもそう思いますよ！」

ドロシーの言葉にナイアルも反論しなかった。

そして、あのヒツジンがいるかぎり、この一族だけは人間と争わないのではないか。

そんなことを信じてしまう。

格闘家のヒツジンの一族と別れて、ドロシーたちは街道へと戻ってきた。そこで、ジンとは別れた。ドロシーたちは一度、《紅葉亭》に戻らなければならないからだ。

ジンは、飄々とした様子で、「またな」と言った。

再会を約束する別れの言葉だ。

ドロシーもまた、どこかで会えるような気がしていた。

「またですよう」

「じゃあな」

そのままドロシーたちは街道を南へと進んで温泉旅館まで戻った。

※

「へえ、よく撮れてるじゃないか。いいね！」

カメラの後ろ側にある投影版の画像を見ながら《紅葉亭》の女将が声を弾ませる。

「おまえ、ちゃっかりしてんのな」

脇からナイアルが茶々を入れてくる。

「お誉めにあずかりまして！」

「誉めてねえよ」

「後輩の機転を誉めてくれてもよいと思うのですが」

「誉めねえから」

ナイアルはあくまで厳しい態度を貫くつもりのようだ。

しかし、とドロシーは思う。咄嗟にシャッターを切ったところまでは誰でもできるだろうけれど、ここまで至近距離で魔獣同士の戦いをカメラに収めたことは実際、貴重なのではないだろうか。

投影版に映っているのは、片角のヒツジンと人間の武道家が、大型の魔獣クロノサイダーに拳を叩きこんでいる絵だ。

ヒツジンとクロノサイダー。

どちらもツァイス地方で有名な魔獣なのだった。



「うん。かっこいいよ！　どうやって作ったか知らないけどさ。ヒツジンは可愛いことでも有名だし。ツァイスの思い出としてはばっちりだね！」

「えっ。いえ、作ったのではなくて、ほんとにそのまま映しただけなのですが」

「いやいや、そこまでしてくれなくていいんだよ。これが合成だって、どっちもツァイスの名物であることに変わりはないからね」

「いえ、ほんとにこれは……」

「まあ、魔獣同士だって戦うこともあるかもね。人間が傍に寄れるとは思わないけれどさ」

何度説明しても、女将さんは写真に収めた戦いが、実際に目の前であったことだと信じてくれなかった。

まあいいか、とドロシーは途中で諦めた。

だいじなのは、女将さんが喜んでくれることなのだし。

後は、宿の土産としてこの写真を焼き増しして、ポストカードにすることだ。それは王都に戻ってからの作業になるだろう。

まだまだ写真印刷は値が張るので、ドロシーが作成できるポストカードの枚数はそんなに多くはないだろうけれど、評判さえよければまた作ることはできる。元の画像は感光クオーツに残っているのだし。

そしてなによりも、お世話になった女将さんを自分の力で喜ばせることができた、ということがドロシーにとっては嬉しいことなのだった。

ゆっくりと温泉に入りなおした。

効能抜群を言うだけあって、一晩ですっかり疲れが取れてしまった。

翌朝になってから、ドロシーとナイアルはツァイスに向けて旅館を出る。

「じゃあ、できあがったら送ります」

「あいよ。楽しみに待ってるよ」

別れ際に女将さんが言って、にっこりと嬉しそうに微笑んだ。

街道を歩いている間、ナイアルはこれからの王都での取材について話してくれた。

どうやら、大きな事件を追っていて、その事件の山場が近い、と感じているらしい。

意気込むナイアルを見ていて、ドロシーも気合を入れなおした。

今までは気に入った風景を見つけては撮るだけだったけれど。

――あたしだからできること、か……。

ツァイスで再会したときにナイアル先輩が言ってくれた。

記憶の中の思い出はいつか色あせる。けど、感光クオーツに刻まれた風景は残る。

色あせない思い出を切り抜いてみせるのは、おまえ得意だろ？

ドロシーにはまだ自分に何ができて何ができないのかわからない。

確信なんてもてない。

それでも——

もし、自分が写真を撮ることで、色あせない思い出を残せるなら……。

投影版の片角のヒツジンはいつまでも一葉の写真の中で戦っているのだろう。

仲間たちを護るために。

そんなヒツジンがいたことを忘れずに残しておけるのなら。

ひょっとしたら、自分がカメラを構えることにも意味があるのかもしれない……。

「ところでひとつだけ心配がある」

街道をツァイスへと向かいながらナイアルが思い出したようにぽつりと言った。

「はい？　なんですか、先輩」

「あのヒツジンたちだけどよ」

「……格闘家の？」

「おう」

何を今さら心配しているというのだろう、このひとは。

そう思わないでもなかった。

ナイアルの言葉の続きを聞くまでは。

「あいつら、片角に聞けば《紅葉亭》の温泉の位置がわかるってことだよな？」

「それが……何か？」

「効能抜群の温泉。あいつら、ほうっておくと思うか？」

《紅葉亭》の温泉。そこにやって来る無防備な旅人たち。彼らがあのヒツジンたちとばったり出会うなんてことがなければいいのだが……。

そうナイアルは心配するのだ。

「ま、まさかですよぅ！　あは。あはははは。そんな、まさか……」

——まさか、ねえ？

END






**2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪**

**ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります**
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

## 第46回-第47回

**兼久和伴**（『零の軌跡 Evolution』鉱員マルロ役）
**浜本しおり**（『零の軌跡 Evolution』ヨナ・セイクリッド）

46回、47回は、特務支援課見習いとしてラジオのアシスタントを務めているガチくんこと兼久和伴さんと、しおりんこと浜本しおりさんが、ある意味主役（？）となった回となった。「出発！特務しれん課」は、ふたりがパーソナリティーとなり、メインパーソナリティーの水橋かおりさんと小寺可南子さんを取り調べることに。そして「コティオの取調室」では、水橋さんが、ガチくんとしおりんに対して、『零えぼ』で担当した役柄について掘り下げたり、声優の先輩としてアドバイスをする姿が見られた。

### ▶第46回-第47回の舞台裏◀

ラジオ内でガチくんとしおりんが話していた『零えぼ』の収録。この日はガチくんとしおりん、コテさんのほかにも、岡島俊治さんや上倉紀行さんなど、参加予定のjdkバンドメンバー全員が一同に集まり、収録を行った、豪華な一日となったのだ。

## 第48回-第49回

**広橋涼**（『那由多の軌跡』ライラ・バートン）

47回、48回は、『那由多の軌跡』で水橋さんが演じる主人公・ナユタに想いを寄せる、幼馴染のライラ役を務めた広橋涼さんがゲストとして登場。多くの作品で共演してきた旧知の仲だけに、息ピッタリ（？）なふたりのトークで大盛り上がりの回となった。終始「広橋さんに食いつきそうなネタを振らないで！」と水橋さんが言っていたように、広橋さんは普段はボケ担当の小寺さんでさえ圧倒されるほどの暴走っぷりを見せてくれた。

### ▶第48回-第49回の舞台裏◀

数々の名シーンを作り上げてきた、水橋さんと広橋さんという名コンビが揃うということで、台本打ち合わせの時点で、ディレクターにより流れはふたりに任せることが早々に決定された。その結果、ファルコムラジオ史に残る爆笑必至の回となったのだ。

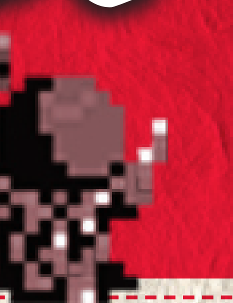


### 今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

# 人生楽キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と
人生について熱く語ります！



## Ys古今曲集



**岡島俊治（Okaji）**

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様こんにちは！ｊｄｋBANDドラマーのオカジです。まだまだ残暑は続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。僕は先月までの制作ラッシュが終り、ゲームに明け暮れる毎日。今月だけでBrandish The Dark Revenant、CD-ROM2版のYsⅣをクリアしたところ。何気に空の軌跡FCも佳境だったりします。これでもまだまだやりたいファルコムゲーは目白押し！そんな最中にYsセルセタの樹海も発売になると言うんだから、本当に大変です（笑）。

今回はそのYsセルセタの樹海の限定版、「イース生誕25周年記念パック」に同梱される「Ys古今曲集」というアルバムについて書いていきたいと思います。

今回、またしても光栄な事にアレンジャーとして参加させて頂いたこのアルバム、僕は3曲のアレンジを担当したのですが、今回も思い入れのある楽曲ばかり。そこで僕が担当した曲の解説なんかしちゃおうかな～と思います！

まずはCD5曲目の「Dreaming」。この曲は1987年当時、オリジナルのYsが発売した当初はなんと「未使用曲」。とある裏技を使わないと聴けない楽曲でした。でも僕はこの曲が大好きで大好きで、PCから直接カセットテープに録音してもらい、延々と聴いていたものです。当時、この曲を聴いて抱いた印象は「ドラムの音がかっこいい」でした。今思えば、PC-88のFM音源3音+PSG音源3音というかなり厳しいスペックの中で、限りあるFM音源のパートをドラムに割いているんですねぇ……さすがにマニアックすぎるかこれは（笑）。とにかくこれだけ思い入れのある楽曲をアレンジするのだから、生半可なアレンジでは駄目だ！とは思いつつも、結局かなり自分の趣味全開のアレンジに。原曲の雰囲気は残しつつも、「今」の新しいサウンドとスムースジャズなギターで彩ってみました。楽しんでもらえるといいなぁ。




さて次は7曲目の「ICE RIDGE OF NOLTIA」。これも大好きな曲で、YsⅡを初めてプレイした当時、ノルティア氷壁に突入した時には、曲が良すぎてゲームをプレイするのを忘れてしまい、入り口の所から動けなくなってしまった思い出が（笑）。この曲のアレンジは、ファルコムの公式サイト内、解説ページでも「別名美月ざんまい」と書かれていた通り、ｊｄｋBANDのヴァイオリニスト・水谷美月さんを大々的にフィーチャー。ヴァイオリンは勿論の事、なんと歌唱までお願いしました。僕はテクノ系の音楽も大好きでかなり聴く方なんですが、以前から彼女の声はトランスにマッチするんじゃないかという予感があったのです。ノルティア氷壁は実際寒いだろうし（笑）、クールなトランスサウンドとの相性はバッチリなハズ！というワケです。いかがでしょうか？

そして最後にご紹介するのは8曲目「イルバーンズ遺跡」。本当にこれもカッコイイ曲。YsⅢの楽曲は本当にファルコムらしい名曲揃いで、今回もイルバーンズ遺跡にするか時の封印にするか……はたまた別の曲なのか、本当に悩みました。でも今回はこの楽曲をチョイス。何故かと言えば、この楽曲を現ｊｄｋBANDメンバーがライブで演奏したら絶対にかっこ良さそう！というイメージが湧いてきたからです。そんなわけで、この曲に関しては可能な限りのｊｄｋBANDメンバーを招集し録音する事に。アレンジもあえて奇はてらわずにストレートなロックアレンジ。もうまさにｊｄｋBAND！なサウンドに仕上がったかと思います。

……あれ、気がつけばもう文字数が限界じゃないか！どうですか担当者様……あと1ページ位……え、そんな事コラム上で言うんじゃないって？ひえ～怒らないでぇ～！（笑）。

そんなわけでまた次回お会いしましょう！ではでは！

▶**「イース セルセタの樹海　イース生誕２５周年記念パック」同梱特典**
(希望小売価格：　8,925円(税抜8,500円))
※「イース古今曲集」単体での販売予定はございません
「イース セルセタの樹海」公式サイト
http://www.falcom.co.jp/ysc_psvita/index.html

**■収録曲**
1. Field of Gale　<イースV失われた砂の都ケフィン>
2. エルディール　<イースIV>
3. SUBTERRANEAN CANAL　<イースI&IIクロニクルズ（イースII）>
4. MIGHTY OBSTACLE　<イースVI -ナピシュテムの匣->
5. DREAMING　<イースI&IIクロニクルズ（イースI）>
6. OVER DRIVE<イースI&IIクロニクルズ（イースII）／イース・オリジン>
7. ICE RIDGE OF NOLTIA　<イースI&IIクロニクルズ（イースII）>
8. イルバーンズの遺跡　<イース -フェルガナの誓い-（イースIII）
9. INNOCENT PRIMEVAL BREAKER　<イースSEVEN>

**■【MSX版イースゲームサウンドトラック】**
10. Open Your Heat（オープニング）
11. Fountain of Love（町）
12. Devil's Step（廃坑）
13. In The Memory（エンディング）
14. Fly with Me（スタッフロール）

# ▶ファルコムニュース◀

**ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！**

## エステルと共に戦場を駆けろ!

### ロードオブヴァーミリオンRe:2 ～再征～ エステル参戦

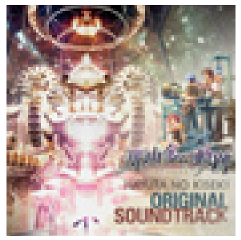


全国店舗で稼働中のアーケードカードゲーム『ロードオブヴァーミリオンRe:2』のアップデートに伴い、プレイヤーが動かせる「ゲスト使い魔」として『英雄伝説空の軌跡』からエステル・ブライトが参戦。カードのイラストは椎名優が担当、特殊技は本編の作中でも登場した「奥義・太極輪」となっている。『ロードオブヴァーミリオンRe:2 ～再征～』は2012年秋に稼動予定。

## 音楽で新しい世界に出かけよう!

### 那由多の軌跡 オリジナルサウンドトラック

PSP専用ソフト『那由多の軌跡』から、劇中使用曲を完全収録した2枚組オリジナルサウンドトラックが登場！　また、jdkバンドボーカルの小寺可南子が歌う主題歌「那由多の星の物語」、デモムービー使用曲「冒険への扉」もボーナストラックとして収録されているなどファンには見逃せない内容となっている。9月27日発売。3129円(税込)。




## 名作RPGが新たに生まれ変わる!

### 日本ファルコム×星海社×4Gamer共同企画　ノベライズの“新地平”

今年25周年を迎えた『イース』をテーマに、星海社、4Gamerとのコラボレーション企画が始動。第１弾となる今回は、『ガンパレード・マーチ』を手掛けた芝村裕吏を始めとする５人の執筆陣が短編競作形式で描く『イーストリビュート』が刊行される。また、2013年の春には「軌跡」シリーズ最新作『那由多の軌跡』のノベライズも決定している。『イーストリビュート』は2012年冬発売予定。

## 大画面で軌跡が生まれ変わる!



人気ストーリーRPG「軌跡シリーズ」第１作目、『英雄伝説 空の軌跡FC』のPSPリマスター版としてHD画面に対応、更に多数の追加コンテンツを収録したプレイステーション３専用タイトル『英雄伝説 空の軌跡ＦＣ：改 HD EDITION』の発売が決定。より鮮明になった美しいビジュアルの魅力を存分に楽しもう。12月13日発売。3990円（税込）。




## 冒険の準備をセットでコンプリート!

### イース セルセタの樹海 アクセサリーセット




9月27日に発売される『イース セルセタの樹海』のアクセサリーのセットがソフトと同日に発売される。５種類のうち１枚が封入されるクリアカードにはフィーナ、レアなど「イース」シリーズ歴代のヒロインの美麗イラストを使用。他にもクロスクリーナーやミニタペストリー、ストラップなどファン必見のアイテム４点をセットでお届け！　9月27日発売。2205円(税込)。





# Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



**碓井康裕**

祝「イースセルセタの樹海」発売！　長く続くこのシリーズも最初は『本集め』から始まったのですね。町中のかすかな謎を解くうち天空の大冒険へとつながる感じは、どれだけ多くの少年少女の冒険心を煽った事でしょう。

**『イース』シリーズ(1987～)**

日本ファルコムの看板作品とも言えるARPGシリーズ。「赤髪の冒険家・アドルが綴った冒険日誌を小説化したもの」というシリーズを通しての設定がある。最新作『イース セルセタの樹海』は9月27日発売。



# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.20


| | |
|---|---|
| 発行人 | 田中一寿 |
| 発行協力 | 日本ファルコム株式会社 |
| 編集 | 小渕智幸<br>大場恵美子 |
| デザイン・DTP | さとうだいち |
| 表紙ロゴデザイン | 荻窪裕司（ビーニーズ） |
| 発行 | 株式会社フィールドワイ<br>〒 101-0062<br>東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F<br>TEL 03-5282-2211（代表）<br>http://www.field-y.co.jp/ |
| 制作・販売協力 | シナノ印刷株式会社 |




# FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



**1　1名様**

**❶『イース セルセタの樹海』メインキャストサイン色紙**

日本ファルコム最新作の発売を記念してキャスト陣が勢揃いした超豪華直筆サイン色紙をプレゼント！ここでしか手に入らないスペシャルなアイテムに注目！




**2　2名様**

**❷『みんな集まれ！ファルコム学園』新久保だいすけ先生サイン入り単行本**

ファルコムマガジンの大人気コミック『ファルコム学園』から日頃の感謝を込めて！「もう買った！」という人も、保存用にピッタリ☆




**3　1名様**

**❸『英雄伝説 零の軌跡 金の太陽、銀の月』**

『英雄伝説 零の軌跡』公式ノベライズの記念すべき第1巻。なんと今回インタビューさせていただいた著者・市川丈夫先生のサイン入り！

## プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●「vol.20プレゼント係」とご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.20プレゼント係

○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

**【記事一覧】**

1：ファルコムロングインタビュー
2：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
3：『みんな集まれ！ファルコム学園』
4：英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット
5：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：FalcomFanArt Collection
8：ファルコムニュース

**宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 10月26日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。